
遊 戯 王デュエルモンスターズHERO's

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊 戯 王デュエルモンスターズHERO's

【Nコード】

N5458D

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

遊 戯 王デュエルモンスターズのストーリーを元ネタにした小説です。一部、カードゲームのルールとストーリーの設定が原作とは違い、ルールはOCGの物を採用しています。なお、カードは遊 戯 王デュエルモンスターズGXから登場している物が多々あります。

決闘00：『プロローグ』（前書き）

オリジナル主人公とオリジナルヒロインが現実↓遊戯王へのトリック
物で、一部、ルールが原作とは違い、OCGの物を採用していま
す。

それらの設定に嫌悪感を持つ人はお戻りください。

決闘00：『プロローグ』

主人公SIDE

（現状を確認してみよう…。朝起きたら、遊戯王の単行本が消えて、デュエルディスクがあつて…。それで、最後は…。）

そう考えながら、本棚にあった筈の『遊戯王』の単行本は元から何も無かつたように全て消えている。

そんな本棚から視線を外し、少年は窓の外の風景に視線を向けてみる…。彼の目に映る窓の外の景色は見慣れた物ではなく、

「…『童実野町』…か。」

『KC』とペイントされた飛行船の飛ぶ見覚えのない町の景色で有ると同時に、彼の好きな漫画の舞台となっている『童実野町』。

完全に余談だが、最初に『KC』とペイントされた飛行船を見た時には思いつきずっこけて、今まで気絶してしまっていた。流石に見るのが二度目ともなれば、目の前の光景を現実と感じ取り、耐性が出る。…正直、本気で自分の脳を疑っているが。

（記憶の中に有る単行本の内容から考えて、今はバトルシティの開幕…デュエルディスクが有るって事はオレにも出場資格が有るって事だよな。）

単行本の記憶を呼び起こしながら、自分の現状を思い出す。これから先の展開に待っているのは、神のカードとファラオの記憶を巡る

戦い。……対抗手段が無い以上、はつきり言って関わりたくない。

そんな事を考えながら、身分証明になりそうな物を探し始め、財布を手に取る。

「……オレは『緋天 龍牙』……童実野高校の二年生か……。つてか、童実野高校の生徒って以外はオレだよな。」

そこまで考えると大事な事に気が付いて、慌ててカードデッキを探し始める。

デュエルディスクにはカードデッキは装着されていない。部屋の何処に有るのかと思って探し始めた結果……机の上に三つのデッキが置いてあった。

それらのデッキがどんなデッキなのか知らずに使うわけにも行かず、そのカードを一枚一枚確認する。それと同時に、そのカードを見る度に思わず言葉を失ってしまう。

「……フェザーマン……バーストレディ……スパークマン……それに、ネオスにオーシャン、フォレストマン……。E・HEROデッキにネオスデッキ、それに漫画版のE・HEROデッキか……。」

一枚一枚モンスターカードの名称を読み上げて行く。

デッキの中に存在しているモンスターカードは『融合』によって無限の力を発揮するE・HERO、正義の闇の波動を受けた新たなヒーロー『N・スペーシアン』、そして、融合前でさえ強力な効果を持つ漫画版のE・HERO。

神の極限をも凌駕するだけの『可能性』を持つモンスター達が今の自分のデッキの中には存在していた。

そして、その三種類のデッキ…それは間違いなく、昨晚眠り始める前に調整していた三種類のHEROデッキだ。元々二つのHEROデッキはネオスデッキのカードと混ぜて使うことを前提にしている事もあり、二つともその枚数は少ない。だが気になっているのはそんな事ではなく…。

「…この世界って原作漫画基準か？ それとも、アニメ版基準なのか？」

前者だとしたらまだいい…。だが、後者だとしたら、まだこの世界にはネオスどころか、E・HEROのカード自体産まれていないのだから不安にもなる。

「…まあいいか…気にしたら負けだ…。…神のカードに係わり合いにならない様に巧く避けよう…。バトルシティには参加してるようだし…オレ。」

カレンダーの日付に書かれている印と『バトルシティ当日』の文字…携帯電話で日々を確認してみると、それもまた同じ日を示していた。

童実野高校の制服に着替え、デュエルディスクを腕に付ける。三種類のE・HEROデッキをベルトにあるカードフォルダに一つ一つ納めていく。

「…さあ、行くか。」

覚悟を決め、両親に行つてくると告げて家を後にする。…目標は平和に予選を楽しみ、予選敗退する事…決勝まで行つて関わりたくないし、特にマリクとか、バクラとか、ラーとか、オシリスとか、オベリクスとか。対抗できる千年アイテムなんて持ってないしさ。そう、間違つても…

「あつ、龍牙君！」

家から出てすぐに後ろから聞えてきた聞き覚えのある声に思わず転んでしまう。もしこれが他の時期だったら関わりたかつたし、一度でいいからデュエルして見たかつた相手だ。

だけど…知り合いだった…つか、友達だったのか、この世界のオレ…！！

怪しまれない様に覚悟を決めて後ろを振り向くとそこには…千年パズルをペンダントの様に首から下げた初代主人公『武藤遊戯』がそこにいた。

「ああ、おはよう、遊戯。」

引きつった笑顔になつていない事に安心したのは秘密だ。

こうして、オレのバトルシティが始まるのだった。そう言えば、あいつはどうしたのかな？

??? SIDE

ここは何処…？ 私の部屋だけど、外の景色は全然違う。でも、この町の記憶は有る。童実野町…遊戯王って言う作品の舞台になっている町だけど…どうして私が？

そばに有るのはデュエルディスクとカードデッキ。明日、龍牙とデュエルって約束してたから、調整してたデッキが有る。D・HERO…龍牙が私にくれたbloooodのカードを生かせるデッキを作ろうと思って相談にも乗ってもらって作ったデッキがそこに有った。

「…約束してたよね…龍牙…。だから、ここにいるよね？」

もし彼がいなかったらという不安、彼との絆、彼から貰ったカードの入ったデッキに触れると心が安らいで安心できる。

「…この大会に出れば…会えるよね…龍牙は私の知ってる龍牙だよね？」

デッキを抱きしめながら、問いかける。

「会いたいよ龍牙…。」

泣きそうになるのを堪えながら、町へ出る…。彼に会うために…。

SIDEアウト

こうして、物語の中心となる少年と少女は戦場へと向かう。

つづく...

決闘00：『プロローグ』（後書き）

新作として、遊戯王デュエルモンスターズの小説です。執筆はTK ODの方を優先させていただきますので、執筆のペースは比較的遅くなります。

決闘01:

(…開会式は終了…それで、城之内がレア・ハンターに『レッドアイズ真紅眼の黒竜』のカードを奪われていて、その事を遊戯に伝えて、バトルシテイ最初のデュエルが始まるか。)

丁度、目の前ではバトルシテイ最初のデュエル、遊戯VSエクゾディア使いのレア・ハンターの決闘デュエルが始まる所だ。

デュエルディスクでのデュエル方法は知っていたが実際に目の前で見てみると迫力が違うことを再確認しつつ、気付かれない様にその場所から離れる。

主にマリクから目を付けられない為に…離れたはずなんだけどなあ。

SIDEアウト

現在、龍牙の目の前にいるのは見るからに怪しげな黒いマントを着たデュエルディスクを腕につけた『グルーズ』のレア・ハンター4 (原作では名前未登場のレア・ハンターは3まで登場、1とは現在遊戯がデュエル中) がいた。

(なんで、関わらない様に行動して、思いっきり出会っちゃうんだよ、オレ?)

強いて言うなら、周りに気付かれない為に態々『裏通り』に入ってしまった事が原因だろう。

デュエルディスクにセットしてあるデッキの内容は初期型のE・H
EROとネオスの混成デッキ。相性で言うなら、もう一組のヒーロ
ーデッキの方がいいんだろうが、今はまだ使わない。

もう一組のヒーロー達は今後の展開用の保険として持つてはいるが、
暫くの間はデュエルには使用しない予定だったのだ。

「緋天 龍牙。ここでお前と出会えるとは私も運がいい。今、この
場でお前にデュエルを申し込む。」

（なんで、こうオレって関わりたくない相手に関わるんだろうか？
まあ、逃げる訳には行かないか。）

「行くぞ！」

「ああ、闘ってやろう。」

「「決闘！！！」」

レア・ハンター LP4000

龍牙 LP4000

龍牙の手札
エレメンタル

E・HEROクレイマン

ドレインシールド

戦士の生還

闇の量産工場

融合回収

「私のターン、ドロー！ 私は『バードマン』を攻撃表示で召喚！ カードを一枚伏せてターンエンド！」

レア・ハンターのフィールドに仮面を付けた鳥人の姿をしたモンスター、バードマンと伏せカードが一枚実体化する。

（バードマン…攻撃力1800の風属性の鳥獣族モンスターか。手札にバードマンの攻撃力を超えるモンスターはいない…だったら。）

「オレのターン、ドロー！ オレは『エレメンタルE・HEROクレイマン』を
守備表示で召喚。カードを一枚場に伏せて、ターンエンド。」

ドローカード『ヒーローシグナル』

重厚な体を持ったゴーレムの様なモンスター『エレメンタルE・HEROクレイマン』が守備の体制で実体化し、伏せカードがセットされる。

（…オレの伏せカードは『ドレインシールド』…時間を稼いで、チャンス待つ。オレのいる『バトルシティ』と『原作のバトルシティ』の差異がオレを助けてくれる。）

事前にバトルシティのルールを確認したが、一つだけ原作のバトルシティのルールが存在しなかった。ただ一つ存在していないルールは『融合モンスターはそのターンに攻撃できない』の一点。

「ふつ、それがお前だけが持つ『エレメンタルE・HERO』か。」

（っ！？ エレメンタルE・HEROを持っているのはオレだけ？ どういう事だ？）

レア・ハンターの言葉に対して疑問が浮かぶが、すぐに意識を現実へと戻す。今はただ目の前のデュエルにのみ集中するだけだ。

「私のターン、ドロー。『ブレードフライ』を攻撃表示で召喚。」

「ブレードフライ！？ 厄介なモンスターを。」

レア・ハンターのフィールドに昆虫族モンスター『ブレードフライ』が召喚される。攻撃力は僅か600と驚異的な物ではなく、単独ではクレイマンの壁を破壊する事は不可能だ。……そう、単独では。ブレードフライの持つ特殊能力…それは。

「ブレードフライは場の風属性モンスターの攻撃力を500ポイントアップさせ、地属性モンスターの攻撃力を400ポイントダウンさせる。」

ブレードフライ

攻撃力600 ↓ 1100

バードマン

攻撃力1800 ↓ 2300
エレメンタル

E・HEROクレイマン

攻撃力800 ↓ 400

守備表示のクレイマンに対してそのカードの影響は大きくは無いが、問題は相手の場のバードマンの方に有る。攻撃力2300にパワーアップしたバードマンは龍牙の守備モンスターのクレイマンの守備力2000を上回ったのだ。

「バードマンでクレイマンを攻撃……！」

レア・ハンターの場のバードマンが大きく飛び上がり、腕の爪状の武器を構えてクレイマンへ急降下してくる。

「畏カード発動、『ドレインシールド』！」

バードマンの攻撃が龍牙のフィールドのクレイマンに突き刺さる前に発生したバリアがバードマンの攻撃を吸収する。

「ドレインシールドの効果でバードマンの攻撃力分だけライフを回復する。残念だったな。」

龍牙 LP 4000 ↓ 6300

「くっ、私はカードを一枚場に伏せターンエンドだ。」

レア・ハンター LP 4000

フィールド

ブレードフライ 攻撃力 600 ↓ 1100

バードマン 攻撃力 1800 ↓ 2300

伏せカード 2枚

手札 4枚

龍牙 LP 6300

フィールド

エレメンタル

E・HEROクレイマン 守備力 2000

伏せカード 無し

手札 4枚

戦士の生還

闇の量産工場

融合回収

ヒーローシグナル

（ライフはオレが勝ってるけど、状況は不利だな。）

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『エレメンタルE・HEROスパークマン』

（スパークマン…攻撃力1600のモンスターカード。手札に融合さえあれば、一気に反撃が出来るそうだが…ない物強請りは意味は無い。）

『エレメンタルE・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚！』

龍牙のフィールドに雷を待とう戦士族モンスター、スパークマンが召喚される。

「スパークマンでブレードフライを攻撃、スパークフラッシュ！」

スパークマンの手から放たれる雷がブレードフライを焼き尽くし、レア・ハンターへと襲い掛かる。

「ぐわ！」

レア・ハンター LP 4000 ↓ 3500

「これで、お前のバードマンとオレのクレイマンの攻撃力も元に戻る。もつとも、守備表示のクレイマンには意味は無いけどな。」

バードマン

攻撃力2300 ↓ 1800

エレメンタル

E・HEROクレイマン

攻撃力400 ↓ 800

「だが、お前のフィールドには攻撃力1600程度のモンスターが攻撃表示のまま残っている、次のターン。」

「分かってるさ。カードを二枚場に伏せて、ターンエンドだ。」

レア・ハンター LP3500

フィールド

バードマン 攻撃力1800

伏せカード2枚

手札4枚

龍牙 LP6300

フィールド

エレメンタル

E・HEROクレイマン 守備力2000

エレメンタル

E・HEROスパークマン 攻撃力1600

伏せカード2枚『ヒーローシグナル、闇の量産工場』

手札2枚

戦士の生還

融合回収

「私のターン、ドロー！ ふっふっふっ…いいカードを引いた。」

「…お前、ポーカーフェイスって言葉知ってるか、態々そんな事を相手に教えてどうする。」

ドローしたカードを見て笑みを浮かべて宣言するレア・ハンターに
対して呆れたような表情でそう突っ込みを返す龍牙。だが、彼の予
感は間違いなく『嫌な予感』を示していたのだ。

「私はバードマンを生贄に『疾風鳥人ジョー』を攻撃表示で召喚！
！！」

レア・ハンターのフィールドに両腕に緑の翼を持ったハーピイレデ
イの男版の様なモンスターが召喚させる。召喚された瞬間、疾風鳥
人ジョーの巻き起こす風が吹き飛ばされ、お互いの伏せカードが手
札へと戻る。

「ふっふっふっ、疾風鳥人ジョーは風属性モンスターを生贄に召喚
した時、お互いのフィールド上の魔法・罠カードを全て持ち主の手
札に戻す。さらに墓地のブレードフライをゲームから除外して、『
シルフィード』を攻撃表示で特殊召喚！」

疾風鳥人ジョー 攻撃力2300
シルフィード 攻撃力1700

「二体のモンスターか。」

「シルフィードでスパークマンを、疾風鳥人ジョーでクレイマンを
攻撃する！！！」

レア・ハンターの宣言と共にシルフィードの剣がスパークマンを切
り裂き、疾風鳥人ジョーの爪がクレイマンを引き裂く。

「っう。」

龍牙 LP 6300 ↓ 6200

「私は改めてカードを二枚場に伏せて、ターン終了。」

レア・ハンター LP 3500

フィールド

疾風鳥人ジョー 攻撃力2300

シルフィード 攻撃力1700

伏せカード2枚

手札3枚

龍牙 LP 6200

フィールド

無し

伏せカード無し

手札4枚

ヒーローシグナル

闇の量産工場

戦士の生還

融合回収

（モンスターを途切れさせる事は無くても、次の相手の攻撃で確実にダイレクトアタックは受けるな。……どうする？）

「オレのターン、ドロー……！」

ライフではまだまだ勝っているが、状況は上級モンスターである疾風鳥人ジョーを含む二体のモンスターが出揃っているレア・ハンターの方が有利なこの状況、それを打破する為の一枚絵は浮かんでこない。

自身の不安を断ち切るかのごとく、何時もよりも大きな声で叫びカードをドローする。

ドローカード『融合』

（よし！）

「手札から魔法カード『闇の量産工場』発動。その効果で墓地の通常モンスター二枚を手札に加える。そして、魔法カード『融合』発動！――！」

スパークマンとクレイマンの姿が重なり、スパークマンの印象を持ちクレイマンの様な巨体を持ったモンスターが召喚される。

「『^{エレメンタル}E・HERO サンダー・ジャイアント』を融合召喚！――！」

「なに！？」

「サンダー・ジャイアントの特殊効果発動！ 1ターンに一度、手札を一枚捨てる事でフィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がサンダー・ジャイアントよりも低いモンスター1体を選択して破壊する。」

サンダー・ジャイアントの効果を宣言しつつ、手札の魔法カード『戦士の生還』を墓地に送る。

「お前のフィールドのモンスターは二体ともサンダー・ジャイアントよりも元々の攻撃力は低い。オレは『シルフィード』を選択する。」

龍牙のフィールド上に存在するサンダー・ジャイアントは片腕を振り上げ、レア・ハンターのフィールド上に存在するシルフィードへと振り上げる。龍牙のその行動にレア・ハンターは一瞬、自分の伏せカードへと視線を向ける。

「ヴェイパー・スパーク……！」

サンダー・ジャイアントの放つ雷が一瞬にして、レア・ハンターのシルフィードを焼き尽くす。

（どういう事だ？ あいつ……今、伏せカードを発動させようとしていたのに発動させなかった……。あいつは……モンスターを『破壊して欲しかった』とでも言うのか？ それとも、単純に発動しても無意味だったとでも言うのか？）

「どうした、サンダー・ジャイアントで攻撃はしてこないのか？」

レア・ハンターの言葉に意識を思考の中から現実へと戻し、すぐにサンダー・ジャイアントへと攻撃の支持を出す。

「（迷っていてもしょうがないか。）サンダー・ジャイアント、疾風鳥人ジョーへ攻撃……！ ボルティック・サンダー……！」

サンダー・ジャイアントの振り下ろす雷を纏った拳が疾風鳥人ジョーへと振り下ろされ、レア・ハンターのフィールド上に存在する疾風鳥人ジョーを粉砕する。

レア・ハンター LP 3500 ↓ 3400

「それで終わりか？」

「いや、カードを一枚伏せる。オレはこれでターンエンドだ。」

レア・ハンター LP 3400

フィールド

無し

伏せカード2枚

手札3枚

龍牙 LP 6200

フィールド

E・HEROサンダー・ジャイアント 攻撃力2400

伏せカード1枚『ヒーローシグナル』

手札1枚

融合回収

ターンエンドを宣言し、レア・ハンターの表情を見る。龍牙のフィールドには攻撃力2400のサンダー・ジャイアントが存在しているのに対してレア・ハンターのフィールド上に存在しているのは伏せカードが2枚のみと、圧倒的に龍牙の方に利が有るのだ。

（奴のフィールドの2枚の伏せカード…あれは…なんだ？）

「私のターン、ドロー。私は『ドレイク』を攻撃表示で召喚する。」

「は？」

レア・ハンターのフィールドに召喚されたモンスターを見て思わずそんな声を出してしまった。

それもそのはず…レア・ハンターのフィールドに召喚されたモンスター『ドレイク』の攻撃力は僅か800、その攻撃力の差は1600と、どれだけ強化してもサンダー・ジャイアントには簡単には届かないモンスターなのだ。

「そして、罾カード発動『ゴツドバードアタック』。」

「なに!？」

レアハンターのフィールドに存在するドレイクの全身が燃え上がり、龍牙のフィールドのサンダー・ジャイアントとヒーローシグナルを破壊し、龍牙のカード二枚を道連れにそのまま燃え尽きて消え去っていく。

「オレのサンダー・ジャイアントが…。」

「ふっふっ…さらにもう一枚のカードも発動させる。『リビングデッドの呼び声』。」

レア・ハンターの罾カード『リビングデッドの呼び声』の効果によってフィールド上に再びバードマンが召喚される。

「バードマンでダイレクトアタック!」

レア・ハンターの宣言と共にバードマンの爪が龍牙の体を引き裂く。
ソリッドレジョン
立体映像の筈のそれは痛みはないが、現実自身が引き裂かれた様にも感じてしまう。

龍牙 LP 6200 ↓ 4400

「くっ。」

「1枚カードを伏せてターンエンドだ。」

レア・ハンター LP3400

フィールド

バードマン 攻撃力1800（リビングデッドの呼び声の効果で蘇生召喚）

リビングデッドの呼び声

伏せカード1枚

手札2枚

龍牙 LP4400

フィールド

無し

伏せカード無し

手札1枚

融合回収

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『^{エレメンタル}E・HEROフェザーマン』

（墓地のカードはサンダー・ジャイアント、スパークマン、クレイマンの三枚か…融合回収で手札に戻しても意味は無いか…。）

「フェザーマンを守備表示で召喚してターンエンドだ。」

「何だ、早々に逃げの一手か？ 私のターン、ドロー！ 私は『^{ソニ}音ッ

速ダック』を攻撃表示で召喚する。」

レア・ハンターのフィールドに新たに召喚されたのは緑色のダック
：外見は弱そうだが、その攻撃力は1700と隣に並んでいるモン
スター『バードマン』との攻撃力の差は僅かに100と高い攻撃力
を持ったモンスターなのだ。

「音速^{ソニック}ダックでフェザーマンを攻撃、バードマンでダイレクトアタ
ック！」

音速^{ソニック}ダックの突進がフェザーマンを打ち砕き、それに続くようにバ
ードマンの攻撃が龍牙の体を引き裂く。

「くっ。」

龍牙 LP 4400 ↓ 2600

「私はこれでターンを終了する。」

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『E・HEROエアーマン^{エレメンタル}』

「オレはE・HEROエアーマンを攻撃表示で召喚！」

龍牙のフィールドに召喚されたジャイロをつけた翼を持った戦士。

「エアーマンの効果発動、導きの風『コーリングウィンド』……！」

エアーマンの翼が巻き起こす風が龍牙のデッキから一枚のカードを

吹き飛ばす。そして、そのカードは龍牙の手札へと収まる。

「エアーマンの効果は二つあり、召喚した時一つ選んで発動できる。オレはデッキから『HERO』と名の付いたカードを1枚手札に加えることが出来る効果を使う。オレはこの効果でデッキから『E・HEROネクロダークマン』を手札に加える。そして、魔法カード融合回収発動、手札に墓地のスパークマンと融合を加えて、『融合発動！！！』」

龍牙のフィールドにスパークマンと新たに呼び出されるモンスター『ネクロダークマン』と混ざり合い新たなモンスターを誕生させる。

「来い…^{エレメンタル}『E・HERO ダーク・ブライトマン』！！！」

新たに龍牙のフィールドに召喚されたのはネクロダークマンを意識させる黒い体にスパークマンを意識させる金色の鎧を纏ったHERO^{エレメンタル}『E・HERO ダーク・ブライトマン』、攻撃力2000とレア・ハンターのフィールド上に存在するもっとも攻撃力の高いバードマンの攻撃力を上回るE・HERO^{エレメンタル}の閥属性の融合体の一体。

「ダーク・ブライトマンはバードマンに…エアーマンは音速^{ソニック}ダックに攻撃！！！！」

龍牙の攻撃宣言によって、彼のフィールドに存在する二体のHEROがそれぞれの攻撃対象に向かう。だが、レア・ハンターは龍牙のフィールドに存在するモンスター達の攻撃に対して、余裕を持ってカードの発動を宣言する。

「甘い！ 畏カード発動！！！！ 『攻撃の無力化』！！！！」

「くっ。オレの手札は無いターンエンドだ。」

バトルフェイズが終了し、手札が無い以上は、既に自分に出来ることと言えばターンエンドを宣言することだけ、自身のターンの終了を宣言する。

レア・ハンター LP 3400

フィールド

バードマン 攻撃力1800（リビングデッドの呼び声の効果で蘇生召喚）

音速ダック ^{ソニック} 攻撃力1700

リビングデッドの呼び声

手札2枚

龍牙 LP 2600

フィールド

エレメンタル

E・HERO ダーク・ブライトマン 攻撃力2000

エレメンタル

E・HERO エアーマン 攻撃力1800

手札0枚

「私のターン、ドロー！ くっくくくっ…先ほどのお前のターンは危なかった。もう少しで大事な生贄を全滅させられる所だった。」

ドローしたカードを手札に加え、手札のカードの中の一枚を手に取り、レア・ハンターは笑を浮かべながら、そう語り始める。

「そう、わがデッキ最強のモンスターのな…！！ フィールドの風属性モンスター二枚を生贄に捧げ…来い、神鳥シムルグ…！！」

レア・ハンターのフィールド上に召喚されるのは王冠を頂く風をイメージさせる緑の羽毛を持った巨鳥、神鳥シムルグ。風属性の鳥獣族モンスターの最大で最大の攻撃力2700も驚異的だが、一番の脅威はその特殊能力にあるのだ。

「厄介…いや、このタイミングで最悪なモンスターを…」

フィールドに召喚された神鳥シムルグを一瞥しつつ、そんな感想を漏らす傍ら、『このモンスター…バトルシテイの時に存在してたのか？』等と言う感想を浮かべてしまう。

「神鳥シムルグでエアーマンを攻撃！ ゴッドストーム！！！」

神鳥の巻き起こす風がエアーマンを吹き飛ばし、その体を砕く。攻撃力2700の攻撃力に対して、攻撃力1800のモンスターの戦闘の結果では、明らかに分かりきったものでしかなかった。

「くっ。」

龍牙 LP 2600 ↓ 1800

「更にカードを二枚場に伏せ、ターンエンド。さあ、神鳥シムルグの特殊能力発動！ ゴッドトルネード！！！」

空高く舞い上がった神鳥シムルグが龍牙とレア・ハンターのフィールドに竜巻を巻き起こす。レア・ハンターのフィールドでは二枚の伏せカードが盾となるが、龍牙のフィールドには盾となる物は無く、そのまま竜巻が直撃する。

龍牙 LP 1800 ↓ 800

「神鳥シムルグの特殊効果、お互いのプレイヤーはエンドフェイズ毎に1000ポイントのダメージを受ける。だが、プレイヤーが受けるダメージは魔法・罠カードをコントロールしている数×500ポイント少なくなる。お前の手札はゼロ、このターンに魔法・罠カードを引き当てなければ、このターンでお前の敗北は決定する。仮に引き当てたとしても、次のターン何もしなければ、私の勝ちだ。」

「…そうか…。オレのターン、ドロー。」

勝ち誇って自分の切り札の能力を解説するレア・ハンターに対して龍牙は飽く迄冷静に言葉を返す。

（確かに…奴の言うとおり、神鳥シムルグをダーク・ブライトマンの効果で破壊したくても、攻撃してくれなきゃな…。）

ドローカード『ホープ・オブ・フィフス』

（…使わなくて負けるより、このカードを使って得られた可能性に賭ける…。）

「オレは手札の魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』を発動、墓地のクレイマン、スパークマン、フェザーマン、エアーマン、サンダー・ジャイアントの五枚の『エレメンタルE・HERO』をデッキに戻して、シャッフル。その後、二枚のカードをドロー。」

魔法カードの効果で二枚のカードをドローし、そのカードを確認した時、龍牙は表情を変える。

「くつくつく…どうやら、最後の希望も「いや、オレは希望を掴んだ。」なに!？」

デュエルディスクの一部が展開し、フィールド魔法使用を使う際に設置する部分が展開され、その場に手札のカードの中の一枚をセツトする。

「フィールド魔法『ネオスペース』発動!!!」

それに伴い周囲の景色が変化する。ソリットビジョンで映し出されるフィールドは路地裏の風景から、七色の風景を持つ空間へと変化する。

「くつ…だが…」

「やれやれ…このカードはまだ使う気は無かったんだけどな…今の状況じゃ贅沢は言えない。オレは墓地のネクロダークマンの効果で手札の『E・HERO』^{エレメンタル}を生贄なしで特殊召喚する。」

龍牙は自分の手札に存在する最後のカードを召喚する。

「来い、『E・HERO』^{エレメンタル}ネオス!!!」

龍牙が召喚したモンスター『E・HERO』^{エレメンタル}ネオス…今までのE・HEROとは印象の違う姿をしたモンスターで、7の通常モンスターで攻撃力2500と能力は平均的な上級モンスター。本来の力を発動するには他のカードの力が必要となる。だが…今は単独の能力だけで十分勝ち目はある。

「だ…だが、攻撃力はシグルムの方が…」

「フィールド魔法ネオスペースの効果でネオスの攻撃力は3000にUP。」

「なに!？」

「行くぜ…ネオスで神鳥シグルムへ攻撃!!! ラス・オブ・ネオス!」

ネオスの振り下ろす手刀が神鳥シグルムを切り裂き爆散する。

レア・ハンター LP 3400 ↓ 3100

「わ…私のデッキの最強モンスターが…。」

「続いて、ダーク・ブライトマンでダイレクトアタック、ダークフラッシュ!!!」

ダーク・ブライトマンの攻撃が守りの居ないレア・ハンターへと直撃する。

レア・ハンター LP 2500 ↓ 1100

レア・ハンターのライフが削られると同時に龍牙のフィールドに戻ったダーク・ブライトマンは守備の体制を取る。

「くつくつく…このターンで私を「確かにこのターンに倒せなかったけど…シムルグを失った今、そのデッキにネオスを倒せるカードは入っているのか?」くつ…私のターン、ドロー。」

「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ。」（くっ、私の伏せカードは『忍法 変化の術』と『呪われた棺』…だが、最後の一枚は『聖なるバリアーミラーフォース』攻撃宣言した瞬間、貴様のモンスターは全滅だ。）

「オレのターン、ドロー!!!」

ドローカード『R-ライトジャスティス』

「オレは手札から魔法カード『R-ライトジャスティス』を発動。フィールドに存在する『E・HERO』と名のついたカードの枚数分だけ、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する。オレのフィールドのE・HEROはネオスとダーク・ブライトマンの二体…。」

（くっ、だが…『聖なるバリアーミラーフォース』を当てる確立は三分の二…。だ・大丈夫だ。）

「オレは、右端と左端のカードを破壊する。」

レア・ハンター LP1100

フィールド

伏せカード 3枚

『忍法 変化の術』↓破壊

『呪われた棺』

『聖なるバリアーミラーフォース』↓破壊

「な!?!」

「ネオスでトドメだ。ダイレクトアタック!」

龍牙のフィールドのネオスのパンチが直撃し、レア・ハンターを吹き飛ばす。

レア・ハンター L P O

「オレの勝ちだ……… って、何か大事なことを忘れているような気が……。」

『フフ……さっきの遊戯のデュエルが終わった時には居なかったようだけど……君が龍牙か。』

頭^{トウ}に眼の紋章が浮かび上がったレア・ハンターが立ち上がり、龍牙へと話しかけてくる。口調、人格……その二つが明らかに別人である事を龍牙へと告げている。

（しまった！？ レアハンター達ってマリクの意思が宿ってる事忘れてた！）

「おっと、驚かせて悪かったね……ボクの名はマリク。この男はレア・ハンターの中でもそれなりの実力のある男……まさか、勝つとは思わなかったよ。負けた以上はルールに従い、アンティカードの神鳥シムルグとパズルカードを渡しておくよ。」

差し出されたパズルカードをポケットに収め、神鳥シムルグのカードを凝視する。

「……密造したカードじゃないだろうな、これは？」

「ああ、安心してくれていいよ。そのカードは本物だ。ああ、そうそう…君にも忠告しておくよこの町のどこかに神のカードをもつレア・ハンターが潜んでいる。そいつと出会ったら、君と君の持つ『エレメンタル E・HERO』の力を持っても…瞬殺だよ。」

原作のコミックを読んでいる以上誰が神のカードを持っているのかも、神の能力も知っているが、あえて口には出さない。

「さて…それはどうか…。」^{エレメンタル}『E・HERO』の力も『ネオス』の力もこんな物じゃない…。」

宣言するのは情報を極力伏せたままの最低限の挑発…宣戦布告…。

「君との闘いも楽しみにしているよ。」

そう言い残し、レア・ハンター4は眼の紋章^{ウイジャート}が消えると同時に意識を失い崩れ落ちる。

「……はあ…。完璧に目を付けられたな…。バトルシティ編のこの漫画で係わり合いになりたくない人間の同率一位の二人の内の一に…。」

今まで余裕を崩さずに居た龍牙だったが、マリクが去った事を確認し、安堵の息を吐き、後悔の籠った声を出してしまう。

「…それより…あのレアハンターは『エレメンタル E・HERO』をオレだけが持っている様な事を言っていたし、マリクも…。こっちの世界のオレはどんな立場に居るんだ？」

心からの疑問であった。

緋天龍牙
パズルカード二枚所有
レアカード「神鳥シムルグ」
をゲット。

??? SIDE

「ドレッドガイの攻撃で終わり。」

「うわああああ!!!!」

少女のフィールドにいる鎖で繋がった拘束具のような仮面を付けた
モンスターの攻撃が直撃し、対戦相手が吹き飛ばされる。

「私の勝ち。」

そう呟き、その少女はパズルカードとアンティルールのカードを受

け取り、その場を立ち去っていく。

「…一人はやだよ…龍牙…。」

悲しみを含む少女の呟きは誰にも届く事無く、町を包む歓声の中に消えて行った。

つづく…

決闘02：

龍牙SIDE

現在、オレはのんびりと城之内対エスパー紹場の決闘^{デュエル}を観戦中だ。
城之内が上級モンスターの『魔導騎士ギルティア』を生け贄なしで
召喚してミスした所で相手の『サイバレイダー』のダイレクトア
タックを受けている。

「…オレの知ってる展開なら、この決闘^{デュエル}は城之内の勝ちなんだろう
けどな…。」

そもそも、ここで手に入れた『人造人間サイコ・シヨッカー』が後
々までの城之内の切り札になるからな。今思うと…城之内のデッキ
の切り札って全部『アンティール』で手に入れた物が殆どだよな。
レッドアイズといい…一番の疑問としては『ギルフォード・ザ・ラ
イトニング』のカードの存在だろう。

「…おつ、天使と悪魔のサイコロのコンボで相手の上級モンスター
を撃破か。」

丁度、パワーアップした『ランドスターの剣士』がパワーダウンし
た相手の『魔導ギガサイバー』を返り討ちにしている。

「…しかし、『神鳥シグルム』か…。さっきのデュエルで完璧に目
を付けられたな…。」

負ける訳には行かなかったとは言え、グルズのレア・ハンターを
一人、見事に返り討ちにしてしまった以上、間違いなく目を付けら

れたよな。仕方ないから、こうなったら…開き直って、レア・ハンター退治でも始めるか？

SIDE アウト

結果を知っている以上、これ以上見る間でもないと考えて、観戦者達の中から抜け出しつつ、龍牙は再び路地裏へと入る。下手に目立つところに居て、目を付けられたばかりのグールズに再び出会わない様にする為で有るが…。

原作のコミックスで遊戯や海馬と言ったメインキャラ達と戦ったレア・ハンター達は数人ほどであり、原作の展開を知っていても何処にいるか分からないのが大半なのだ。

「…それにしても…悪人って人種は何故かこういう所が好きだよな…。」

そう心の中に浮かんだ疑問を呟きながら、前方へと視線を向ける。目の前にはレア・ハンターと思しき男が倒れている相手のデッキからカードを抜き取っている姿がある。

「…クツクツクツ、獲物が向こうからやってきてくれたか…。」

堂々と宣言する本日二度目の出会いとなるレア・ハンター5を一瞥しつつ、呆れた様子で溜息を付きつつ、デュエルディスクにデッキを装着させる。引き続きのE・HEROデッキを…。

（なんで、オレはグールズと縁が有るんだ？）

冗談抜きで本気でそんな事を考えてしまう。そもそも、こつちの自分がどんな立場に有るのかも、E・HERO^{エレメンタル}のカードを所持しているのが自分だけなのかも、そして…。

（考えてもしようがないか。）

「デュエル!!!」

レア・ハンター LP 4000
龍牙 LP 4000

龍牙の手札

E・HEROフェザーマン

E・HEROスパークマン

融合

融合

攻撃の無力化

（融合が二枚：キーカードが有るのはありがたいけど、フェザーマンとスパークマンじゃ素材不足か。）

フェザーマンとスパークマンのカードを素材とするE・HEROは存在しているが、それにはもう一枚カードが必要になってくる。

「行くぞ、私の先行、ドロー。モンスターをセットしてターンエンドだ。」

手札は五枚で伏せカードも無く、相手フィールドは裏守備表示のカードが一枚だけ…伏せモンスターに警戒しつつ、龍牙はデッキへと触れる。

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『戦士の生還』

龍牙の引き当てたカード『戦士の生還』は今の状態では役に立たないカード。故に今の彼が出来る手段も限定されてくる。

「オレはフェザーマンを攻撃表示で召喚。」

龍牙のフィールドに現れる緑色の体と翼を持ったモンスター攻撃力1000と低い攻撃力ではないが、戦士の生還のカードが有る現状ならば一手目としてはそれ程愚策ではない。（除外された場合は、スパークマンの方が被害は大きい為に）

「フェザーマンで伏せモンスターを攻撃、フェザーブレイク……！」

フェザーマンが手裏剣の様に打ち出す羽がレア・ハンターの伏せモンスターに突き刺さり、そのまま爆散する。

「よし！」

破壊できた事を喜びつつ相手のリバー効果の発動を待つ龍牙の視界に自身のモンスターフェザーマンに不気味な肉片が取り付くのを見る。

「エーリアン・グレイのモンスター効果発動、相手フィールド上に

表側表示で存在するモンスター1体に、Aカウンターを1つ置き、私はカードを一枚ドロウする。」

（Aカウンターにエーリアン・グレイ…エーリアンデッキか。だったら…。）

「カードを二枚伏せてターンエンド。」

フェザーマンの左に伏せカードがセットされ、龍牙はターンエンドを宣言する。

レア・ハンター LP4000

フィールド

無し

伏せカード無し

手札6枚

龍牙 LP4000

フィールド

E・HEROフェザーマン（Aカウンター×1）

伏せカード一枚

攻撃の無力化

戦士の生還

手札4枚

E・HEROスパークマン

融合

融合

「私のターン、ドロー！ 私はエーリアン・ベーターを攻撃表示で召喚！」

レア・ハンターのフィールド、その右端に新たなエーリアンが召喚される。攻撃力800とフェザーマンの攻撃力よりも200程低いモンスターだが、その特殊効果は…。

「エーリアン・ベーターは正面にカードが存在しない場合、ダイレクトアタックが可能となる。」

エーリアン・ベーターの撃ち出したレーザーが龍牙のフィールドのカードを避け、龍牙へと直撃する。

「くっ。」

龍牙 LP 4000 ↓ 3200

攻撃力800程度のモンスターが攻撃表示のままフィールドに残る危険は有るが、それでもこのダメージは地味に大きい。

「更にカードを二枚場に伏せ、私のターン終了だ。」

レア・ハンター LP 4000

フィールド

エーリアン・ベーター

伏せカード二枚

手札4枚

龍牙 LP 3200

フィールド

E・HEROフェザーマン（Aカウンター×1）

伏せカード一枚

攻撃の無力化

手札5枚

E・HEROスパークマン

融合

融合

戦士の生還

相手フィールド上のカードは伏せカード二枚、そして、攻撃力80程度の攻撃力しか持たないエーリアン・ベーターの三枚。モンスター自体の効果はそれなりに厄介だが、相手のモンスターはエーリアンの中でも一番弱いカードとも言え、簡単に破壊できるカードだが、問題は相手フィールド上の二枚の伏せカードだ。

「オレのターン、ドロー！！！」

ドローカード『E・HERO ワイルドマン』

（ワイルドマン…いいカードだけど、融合は使えないか…。スパークマンとワイルドマン…どちらを温存する？）

攻撃力だけならばスパークマンの方が上だが、ワイルドマンのカードの持つ罠カード無効の効果は捨てがたい。そして、自分のフィールドに有るモンスターは攻撃力1000とAカウンターの乗ったフェザーマン一枚だけ、破壊する事に対して躊躇する必要の無いエーリアン・ベーターなら、モンスターを召喚すべきだろう。

「オレは『E・HERO ワイルドマン』を攻撃表示で召喚!!!」

エアリアン・ベーターの正面に対峙する様に、龍牙のフィールドに褐色肌の剣を持った戦士と言う風貌のモンスター『E・HERO ワイルドマン』が召喚される。

「フェザーマンでエアリアン・ベーターに攻撃、フェザーブレイク
!!!!」

龍牙の攻撃宣言に従うようにフェザーマンが空高く舞い上がり、勢い良く急降下しながら、エアリアン・ベーターへと向かう。

「甘い、畏カード発動! ドレインシールド!」

エアリアン・ベーターの前に出現した光の壁がフェザーマンの攻撃を防ぎ、緑色の光がレア・ハンターへと流れていく。

「フッフッフッ: 私のこれでライフは1000回復する。」

レア・ハンター LP 4000 ↓ 5000

ドレインシールドは自分も使っているカードなのでその効果は良く分かっている。これで残りの伏せカードは一枚だけ。

「ワイルドマンで攻撃、ワイルド・スラッシュ!!!!」

ワイルドマンがその剣を振りかざし、エアリアン・ベーターへと切りかかる。今度はレア・ハンターの伏せカードは発動することなく切り捨てられ、撃破された。

レア・ハンター LP 5000 ↓ 4300

「ターンエンドだ。」

レア・ハンター LP 4300

フィールド

無し

伏せカード一枚

手札4枚

龍牙 LP 3200

フィールド

E・HEROフェザーマン（Aカウンター×1）

E・HEROワイルドマン

伏せカード二枚

攻撃の無力化

手札4枚

E・HEROスパークマン

融合

融合

戦士の生還

フィールドにはフェザーマンと自身を対象とする罠を無効化するワイルドマンの二体のモンスターと伏せカード『攻撃の無力化』、それに対して相手のフィールドには伏せカードが一枚だけ。状況は自身の方が有利だが、まだ安心できる状況ではない、結果的にライフではまだ自分が負けているのだから。

「私のターン、ドロー！ 永続罠発動、洗脳光線！」

伏せカードが表になった瞬間に発生した怪しげな光線が龍牙のフィールド全体に降り注ぐ、そして、不気味な細胞に取り付かれているフェザーマンが正気を失った目でレア・ハンターのフィールドへと移動する。

「更にフェザーマンを生贄に、エーリアン・マザーを攻撃表示で召喚する！」

目の前の光景に思わず表情を歪めてしまう。フェザーマンの体を突き破って、四本の腕を持った今までのエーリアンよりも人に近い外見をしたモンスターが現れる。

それは攻撃力2300とワイルドマンを上回る攻撃力を持つモンスター…エーリアン達のボスとも言える『上級モンスター』の一体。

「更に魔法カード、侵食細胞「A」を発動。お前のフィールドのワイルドマンにAカウンターを乗せる。」

エーリアン・マザーが打ち出した細胞がワイルドマンへと取り付く。

「そして、エーリアン・マザーでワイルドマンを攻撃、インベード・ブラスター……！」

エーリアン・マザーの口から撃ち出される光弾がワイルドマンを破壊する。

龍牙 LP 3200 ↓ 2400

龍牙のライフが削り取られ、その次の瞬間、エーリアン・マザーの

口から卵が一つ産み落とされる。そして、卵を突き破ってレア・ハンターのフィールドにワイルドマンが召喚された。

「…オレのモンスターを…。」

「エーリアン・マザーの効果はAカウンターに乗ったモンスターを破壊した時、そのモンスターをバトルフェイズ終了時に特殊召喚する。私は更に永続魔法『「A」細胞増殖装置を発動する。』」

魔法の発動と同時にレア・ハンターのフィールドに出現する溶液に漬かった不気味な細胞の入ったカプセルが出現する。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド。」

レア・ハンター LP 4300

フィールド

エーリアン・マザー

E・HEROワイルドマン（エーリアン・マザーの効果で召喚）

永続魔法 「A」細胞増殖装置

伏せカード一枚

手札1枚

龍牙 LP 2400

フィールド

無し

伏せカード一枚

攻撃の無力化

手札4枚

E・HEROスパークマン

融合

融合

戦士の生還

「オレのターン、ドロー！！！」

ドロークカード『E・HERO クレイマン』

「よし！ オレは手札から魔法カード、『融合』発動！ 手札のスパークマンとクレイマンを融合！ 来い、E・HERO！ サンダー・ジャイアント！！！」

クレイマンとスパークマンの姿が重なり合い、龍牙のフィールドにクレイマンの巨体にスパークマンの印象を持つモンスター『E・HERO サンダー・ジャイアント』が現れる。

この時に龍牙の手札は『融合』と『戦士の生還』の二枚、効果を発動するのに必要なコストにするには二枚とも自分のデッキでの存在価値は高すぎるカードなのだ。だが…

「サンダー・ジャイアントの効果発動！ 手札を一枚捨て、エーリアン・マザーを破壊する。ヴェイパー・スパーク！！！」

龍牙は躊躇無く手札の『戦士の生還』のカードを捨て、サンダー・ジャイアントの振り上げた腕から放たれた雷がエーリアン・マザーを破壊する。そして、エーリアン・マザーの破壊にあわせて、同時に相手のフィールドに存在していたワイルドマンの姿も不気味な細胞と液体に代わり崩れ落ちる。

「さあ、好き放題やってくれた礼だ、たぶり味わえ。サンダー・ジ

ヤイアントでダイレクトアタック！ やれ、ボルティック・サンダ
ー！！！！」

サンダー・ジャイアントの振り上げた腕から放たれた雷球がレア・
ハンターへと直撃する。

「ぐわああああああー！！！！」

目も眩む様な閃光が叫び声と共にレア・ハンターを飲み込む。

レア・ハンター LP 4300 ↓ 1900

「オレはこれでターンエンドだ。」

レア・ハンター LP 1900

フィールド

無し

永続罫 洗脳光線

永続魔法 「A」細胞増殖装置

伏せカード一枚

手札1枚

龍牙 LP 2400

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント

伏せカード一枚

攻撃の無力化

手札1枚

融合

「私のターン、ドロー……！」

レア・ハンターがカードをドローすると同時にカプセルから飛び出した細胞がサンダー・ジャイアントへと寄生する。

「私は魔法カード『死者蘇生』を発動！ エーリアン・マザーを蘇生し、フィールド魔法『異界空間 - Aゾーン』を発動する。」

魔法発動と同時にフィールドが七色の輝きに包まれた宇宙空間へと変化する。上空には何故か円盤らしき物が飛びまわっている。

「クツクツクツ……エーリアン・マザーでサンダー・ジャイアントを攻撃、インベード・ブラスター……！」

フィールド魔法の効果によってサンダー・ジャイアントの攻撃力の減少が起き、二体のモンスターの力関係は逆転する。

エーリアン・マザー 攻撃力2300

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400 ↓ 2100

龍牙 LP2400 ↓ 2100

そして、光弾によって打ち抜かれたサンダー・ジャイアントが再びエーリアン・マザーの効果によって産み落とされた卵の中から誕生する。

「くっ、またか……？」

「私のターンは終了だ。」

レア・ハンター LP1900

フィールド

エーリアン・マザー

E・HERO サンダー・ジャイアント

永続罫 洗脳光線

永続魔法 「A」細胞増殖装置

伏せカード一枚

手札1枚

龍牙 LP2100

フィールド

無し

伏せカード一枚

攻撃の無力化

手札1枚

融合

つづく…

決闘03：

レア・ハンター LP1900

フィールド

エーリアン・マザー 攻撃力2300

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400（エーリ

アン・マザーの効果で召喚）

永続罫 洗脳光線

永続魔法 「A」細胞増殖装置

伏せカード一枚

手札1枚

フィールド魔法『異界空間 - Aゾーン』

龍牙 LP2100

フィールド

無し

伏せカード一枚

攻撃の無力化

手札1枚

融合

（…サンダー・ジャイアントを奪われる危険は有っても、攻撃の無力化はあの状況で使わない方がいいと思ったんだよな。さて…どうする？）

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『強欲な壺』

「手札から魔法カード『強欲な壺』発動！ デッキからさらにカードを二枚ドローする。」

ドローカード『融合回収』『E・HERO ネクロ・ダークマンン』

（手札には融合が一枚、手段は一つか。）

「手札から魔法カード『融合回収』発動、墓地の融合とスパークマンのカードを手札に加える。そして、手札のネクロダークマンとスパークマンを融合！」

光と闇の戦士同士が混ざり合い、スパークマンをイメージさせる黄色い鎧で黒い体を包んだ新たなモンスターがその姿を現した。

「『E・HERO ダーク・ブライトマン』を攻撃表示で召喚！」

ダーク・ブライトマンの攻撃力は2000と相手のフィールドに存在するサンダー・ジャイアントやエーリアン・マザーよりも低く、どちらのモンスターにも太刀打ちできない。だが、ダーク・ブライトマン召喚の目的は戦闘ではなく、ネクロ・ダークマンンを墓地へと送る事なのだ。

伏せカードは『攻撃の無力化』、戦闘でダーク・ブライトマンを狙われた場合と、サンダー・ジャイアントの効果による破壊後の二体でのダイレクトアタック後の防御は可能。気になってくるのは相手のドローカードと手札の合計二枚。そのカードのどちらかが魔法、

罨カードを破壊するカードで有った場合は最悪の事態を迎える結果となる。だから、

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ。」

少しでも、確立を下げるために残った手札一枚を伏せる。手札には起死回生のカードはないが、ネクロ・ダークマンンの効果による7以上の上級E・HEROの召還への布石は用意できた。

それに：破壊された場合のダメージは有ってもダーク・ブライトマンの効果は自身にとって、その大半が有利に働いてくれるのだ。

レア・ハンター LP1900

フィールド

エーリアン・マザー 攻撃力2300

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

永続罨 洗脳光線

永続魔法 「A」細胞増殖装置

伏せカード一枚

手札1枚

フィールド魔法『異界空間 - Aゾーン』

龍牙 LP2100

フィールド

E・HERO ダーク・ブライトマン 攻撃力2000

伏せカード一枚

攻撃の無力化

融合

手札無し

「私のターン、ドロー。」

（ふむ、私の手札のカードに魔法、罨除去のカードは無い。だが、奴から奪ったサンダー・ジャイアントの効果のコストで捨てるには二枚とも惜しいな。）

レア・ハンターがカードをドローした瞬間、相手フィールド上のカプセルから不気味な細胞が飛び出し、龍牙のフィールドに居るダーク・ブライトマンに寄生する。

「更にサンダー・ジャイアントを生贄に『そらけもの宇宙獣ガンギル』を召喚する！！！」

エーリアン・マザーの召喚時とは違い、サンダー・ジャイアントが不気味な細胞へと変化しフィールド魔法でバトルには関係なく上空を飛び回っていた『円盤ムスキー』がその細胞を回収し、何処かへと飛び去っていく。そして、再び戻りフィールド上に降り立つと内部から破裂し、不気味な細胞の集合体の様なモンスター『宇宙獣ガンギル』がレア・ハンターのフィールドに誕生した。

宇宙獣ガンギル 攻撃力2600

「ふっふっふっ…宇宙獣ガンギルは二体の生贄が必要な7のモンスターだが、元々お前のモンスターだったE・HEROを生贄にした事で生贄は一体で済む。ガンギルとエーリアン・マザーでトドメ

だ。やれ！」

レア・ハンターの二体のモンスターが自分へと襲い掛かる瞬間、龍牙は伏せていたカードをオープンする。

「『攻撃の無力化』……！」

ダーク・ブライトマンへと迫る二体のエーリアンの攻撃を魔力の渦が飲み込み、龍牙のフィールドのモンスターを守った。

（今の手札で奴のモンスターを倒せるカードは無い……ここでダーク・ブライトマンを倒させる訳には行かないんだよ。）

「ふん、悪足掻きを。私は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動し、カードを二枚ドロ。そして、カードを一枚場に伏せ、ターンエンドだ。」

レア・ハンター LP 1900

フィールド

エーリアン・マザー 攻撃力 2300

宇宙獣ガンギル 攻撃力 2600

永続罨 洗脳光線

永続魔法 「A」細胞増殖装置

伏せカード二枚

手札一枚

フィールド魔法『異界空間 - Aゾーン』

龍牙 LP2100

フィールド

E・HERO ダーク・ブライトマン 攻撃力2000（Aカウン
ター×1）

伏せカード一枚

融合

手札無し

相手のフィールドのモンスターは上級モンスターが二体、それに対して龍牙のフィールドに存在しているのはその二体よりも攻撃力の低い上級モンスターが一体だけ。そして、相手のフィールド魔法やAカウンターにより攻撃力は更に下げられる。しかも、相手フィールドにあるのは二枚の伏せカード。

手札は無く、自分がこのターンでやる必要が有るのは二体のモンスターの撃破とフィールド魔法の破壊。一枚のカードでそれを遣り切る必要は無いが、最低でもフィールド魔法だけは破壊しておきたい。

「オレのターン、ドロー！」

ドロークカード『ホープ・オブ・フィフス』

「魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』発動、クレイマン、スパークマン、フェザーマン、ワイルドマン、サンダー・ジャイアントをデッキに戻し、二枚ドロー！」

ドロークカード『R・ライトジャスティス』 『増援』

（よし！ いいカードを引いた。増援であのヒーローを手札に加えれば、二体のモンスターとフィールド魔法の対処が出来る。）

「手札から魔法カード『増援』を発動！ デッキから『E・HERO
O エアーマン』を手札に加えて、召喚！」

龍牙のフィールドにエアーマンが召喚された瞬間、エアーマンの巻き起こす風がフィールドを包み込む。

「そして、特殊効果を発動、導きの風コーリングウインド。デッキから手札に『E・HERO』を一枚手札に加える。オレは『E・HERO キャプテン・ゴールド』を手札に加える。」

エアーマンの風が龍牙のデッキより一枚のカードを吹き飛ばし、手札に加えた。

「ふん、今更モンスターを手札に加えた所で何の意味が…。」

レアハンターが台詞を言い切る前に龍牙は先程手札に加えた、摩天楼のビルの上に立つ赤いマントを着けた黄金の鎧を身に付けたヒーローの描かれたカードを突きつける。

「さらに、『E・HERO キャプテン・ゴールド』の効果でこのカードを墓地に送る事でデッキから『摩天楼・スカイスクレイパー』のカードを手札に加える。これがどういう意味か…よく分かるだろう？」

これはエアーマンが手札に有れば消費するカード一枚で可能なコンボの一つである連続サーチ。

「くっ…まさか。」

「手札から魔法カード『R・ライトジャスティス』を発動、前のターンで伏せたカード一枚と「A」細胞増殖装置を破壊する。」

ダーク・ブライトマンの打ち出した白と黒の光がレア・ハンターの伏せカードを破壊し、エアーマンの翼のジャイロから巻き起こす竜巻が不気味な細胞の入った機械を粉碎する。

「貴様が破壊したカードは『聖なるバリアーミラーフォース』」
悪くない選択だったな。」

強力な罠を破壊されてもまだレア・ハンターの表情には余裕が浮かんでいる。強力なモンスターが二体も並んでいる事から来る余裕なのだろう。

「さて、ここからはヒーローの戦う舞台で戦わせてもらうぜ。フィールド魔法『摩天楼・スカイスケレイパー』^{まてんろう}を発動！」

龍牙はデュエルディスクのフィールド魔法用の部分を展開させフィールド魔法を発動させる。その瞬間、不気味な空間は碎け散り、周辺の空間は高層ビル街へと変わった。

「くっ…だが…お前のモンスターの攻撃力は私のエーリアン・マザーとガンギルよりも圧倒的に低い。」

「さて、それはどうかな？ エアーマン、エーリアン・マザーを攻撃！ サインロンシュート！」

エアーマンのジャイロから打ち出された竜巻がエーリアン・マザー

を飲み込み、粉々に破壊する。

「なに!?!」

「スカイスクレイパーはE・HEROが自分よりも攻撃力が高いモンスターと戦う時、攻撃力を1000アップする。」

レア・ハンター LP 1900 ↓ 1400

「続いて、ガンギルをダーク・ブライトマンで攻撃! ダークフラッシュ!」

龍牙の宣言と共に打ち出されたダーク・ブライトマンの放つ黒い稲妻がガンギルを破壊する。

レア・ハンター LP 1400 ↓ 1000

そして、攻撃を終え、フィールドに戻ったダーク・ブライトマンはそのまま守備体制を取る。

「ふつ、罨カード発動『命の綱』! 手札を全て捨て…蘇れ、^{そらけ}宇宙獣ガンギル!」

レア・ハンターが手札のカード『エーリアン・マーズ』を墓地に送り、再びエーリアン達の最終兵器がフィールドに召喚される。

^{そらけもの}宇宙獣ガンギル 攻撃力 2600 ↓ 3400

それは破壊される前よりも巨大で姿でガンギルは蘇った。スカイスクレイパーの高層ビル群よりも高く、パワーアップしたヒーローで

も破壊する事は出来ないだろう。

「なん…だと？」

「ふっふっふっ…先程のターン、エーリアン・マザーは倒されたが私のフィールドにはパワーアップしたガンギルがある。」

「ターンエンドだ。」

レア・ハンター LP 1000

フィールド

宇宙獣ガンギル 攻撃力2600 ↓ 3400

永続罟 洗脳光線

手札無し

龍牙 LP 2100

フィールド

E・HERO エアーマン 攻撃力1800

E・HERO ダーク・ブライトマン 守備力1000 (Aカウン
ター×1)

伏せカード一枚

融合

手札無し

フィールド魔法『摩天楼 ―スカイスクレイパー―』

「私のターン、ドロ。ガングイルでエアーマンを攻撃する！」

ガングイルの口から撃ち出された破壊光線が龍牙のフィールド上のエアーマンを跡形も無く吹き飛ばす。

「くっ。」

龍牙 LP 2100 ↓ 500

相手がモンスターを召喚しないのは龍牙のフィールドのダーク・ブライトマンの効果に対する警戒だろう。

このターン、最も龍牙にとって都合なのは貫通ダメージを受けないモンスターでダーク・ブライトマンが破壊される事。そうすれば、確実にダーク・ブライトマンの効果でガングイルを破壊する事が出来たのだ。

「私はカードを一枚伏せる。これでターンエンドだ。さあ、お前のターンだ。」

（くっ。）

状況は龍牙にとって最悪の一言に尽きる。考えられる手段はダーク・ブライトマンの特攻による効果での破壊だが、それで決着を着けるにはモンスターを一枚でもドロする必要が有る。

次はダーク・ブライトマンを守備表示のまま待機させて、二体のモンスターを出された場合、攻撃していないモンスターを効果で破壊して一ターンを凌ぐ。それでも、『エアリアン』にはAカウンターに乗ったモンスターを破壊した場合二回攻撃が出来るモンスター。『

エーリアン・ハンター』が居る。

（私の伏せカードは『非常食』…ダーク・ブライトマンの効果を狙った後他のモンスターでトドメを狙ってもライフを回復させる事が出来る。そして、守備表示のまま場に残したとしても、残りのライフは100。ほぼ私の勝ちが決まる。）

「オレのターン、ドロ。」

ドロカード『カップ・オブ・エース』

（確立は二分の一。なら、0から二分の一に確立を増やさせて貰うか。）

「手札から魔法カード『カップ・オブ・エース』発動！」

龍牙とレア・ハンターの二人のフィールドの間に大きなコインが現れる。

「…このカードの効果はコイントスを行い、面が出た場合はオレが…裏が出た場合はお前がカードを二枚ドローできる。」

龍牙がカードの効果を宣言した瞬間、中央に存在しているコインは空高く舞い上がる。

（くっくくく…丁度いい、態々カードを引かせて貰えるとはな。）

（…オレの予想が正しければあいつの伏せカードはこのターンを凌ぐ事が目的のカード…フィールドに残っている永續罠から考えてライフ回復かモンスター破壊のどちらか…なら…。）

（（このコイントスで勝者は決まる。））

奇しくも二人の考えは一致していた。だが、龍牙はこの賭けで勝つたとしてもこのターンでパワーアップしたガンギルを倒し、決闘デュエルの決着を付けられるカードが無い限り圧倒的に不利。

二人の注目が集まる中、互いのフィールド中央のコインが落ちる。

「表か…？」

「裏か？」

出た目は……………『表』。

「よし！ オレはカードを二枚ドロー。」

一枚目『H・ヒートハート』

（いいカードだ。でも、このカードだけじゃ、まだこのターンの勝利には届かない。）

二枚目『E・HERO ネオス』

「来たぜ、切り札。墓地の『E・HERO ネクロ・ダークマン』の効果発動、手札のE・HERO 一体を生贄無しで召喚できる！ 来い、『E・HERO ネオス』！」

摩天楼のフィールドを舞台に宇宙獣そらけものガンギルと対峙する形で現れる某光の巨人をイメージさせるモンスター『E・HERO ネオス』

が龍牙のフィールドに現れる。

だが、レア・ハンターのフィールドに存在している宇宙獣ガンギルそらけものはネオスや守備表示のダーク・ブライトマンを見下ろすほどの巨体で存在している。

「ダーク・ブライトマンを攻撃表示に変更する。」

守備態勢のダーク・ブライトマンが攻撃態勢を取る。

「これで最後、手札から魔法カード『H・ヒートハート』発動！
モンスター一体の攻撃力を500ポイントアップさせる！」

浮かび上がる炎で描かれた『H』の文字が龍牙のフィールドに存在するネオスと重なり合い、その能力を強化させる。

E・HEROネオス 攻撃力2500 ↓ 3000

「くつ、だが…まだ私のガンギルを倒す事は…。」

「フィールド魔法の効果を忘れたのか？ ここはヒーロー達の戦う場所だ。行くぜ、E・HEROネオスで…宇宙獣ガンギルそらけものを攻撃！」

龍牙の攻撃宣言と同時にフィールド魔法の効果を得て、彼のフィールドに存在するE・HEROネオスが巨大化していく。

E・HEROネオス 攻撃力3000 ↓ 4000

その巨体は宇宙獣ガンギルそらけものと同等の大きさとなる。そして、ネオスは舞い上がり、手刀を振り下ろす。

「ラス・オブ・ネオス！」

ネオスの手刀により切り裂かれたガンギルは抵抗する事も出来ず爆散する。

「くっ、速攻魔法カード『非常食』を発動する。洗脳光線を破壊してライフを回復させる。」

レア・ハンター LP 1000 ↓ 2000 ↓ 1600

「残念ながら、これで終わりだ。ダーク・ブライトマン！」

龍牙の指示を受けて、ダーク・ブライトマンの一撃がレア・ハンターのライフを完全に削り取る。

「ぐ…ぐわあああああああ！…！」

レア・ハンター LP 1600 ↓ 0

叫び声を上げてライフがゼロになると同時にレア・ハンターはその場に倒れる。

（これで二勝目か。それよりも…今回は出てこないのか…マリク。）

近付いてもマリクと人格が交代する様子は無いので警戒しながらレア・ハンターに近付き、パズルカードを受け取る。特に賭けたパズルカードの枚数は宣言していなかったので一枚だけだが。

「…ルールでパズルカードは貰っていくぞ。」

緋天龍牙

パズルカード三枚所有

（…まあ、まだ温存してる切り札もある事だしな。）

その場から離れながら、もう一組のカードへと視線を向け、そんな事に思考を向ける龍牙だった。

??? SIDE

「デビルガイの攻撃で終わり。デステニー・ロード。」

ボロボロのマントを纏ったモンスターの攻撃が決まり、相手のライフをゼロにする。決闘^{デュエル}の終了を持って彼女のフィールドに存在するモンスター三体の『D・HERO』達もその姿を消す。

「……これで四枚目……勝ち続けていけば、会えるよね……龍牙。」

パズルカードを受け取り、デッキから一枚のカードを取り出して少女はそう呟く。そのカードは彼女の絆の証なのだから。

「お前、ワイとデュエルや！」

「…だから、それまで負けない…。」

そう呟きながら、少女は新しい対戦相手と対峙する。

つづく…

決闘04：

（…これで、レア・ハンターの撃破数二人目か…。それと…パズルカード三枚目。）

これで計算上決勝進出に必要なカードが半分まで揃った事になる。決勝進出まであと半分と言った所だが、はっきり言って龍牙には決勝進出の意思は無い。

そもそも、考え方で言えばパズルカード三枚と言う現状は、決勝進出にほぼ王手と言う事に繋がる。

（…いや、普通に勝てないだろう…：遊戯とか、海馬とか、マリクとか。）

城之内だけは勝てる可能性は有るのだろう、勝てない相手にはランクインしていないのはそのためだろうか。そもそも、その内の一人を相手にする結果は、間違いなく命懸けの危険が有るのだ。

思わず溜息を付き、目の前で繰り広げられている城之内対インセクター羽蛾の決闘^{デュエル}に視線を移す。目の前で繰り広蹴られている本編の展開の状況を知るには文字通り『原作キャラ』の行動を見るのが一番だろう。

「『墓荒らし』のカードで相手の墓地の『殺虫剤』を奪い使用する事で相手の切札『インセクト・クイーン』を破壊…鉄の騎士ギアフリードでトドメか。」

目の前の決闘^{デュエル}は彼の呟き通りの展開になって羽蛾のライフがゼロに

なる。他人のデッキに自分のカードを仕込む等と言うイカサマをしてまで負ける姿ははつきり言って自業自得と言つか、天罰觀面と言すべきか？

「さて、筋書きから外れない様に離れさせて貰うか。」

城之内達に見つかからない様に人込みに紛れながらその場から立ち去っていく。

(…遊戯は展開通りなら、神のカードを入手するまで単独行動をしているから、心配はないけど…そろそろ、人形が動き出す時期なんだよな。)

そんな事を考えながら、公園から離れたつつデッキのカードを一枚一枚確認する。太陽神以外のカードならば、やり方しだいで手持ちのカードで戦う事が出来る。そう、ネオスの力なら。

(…まあ、特に原作でマリクの使った『ゴッドファイブ』とか言うコンボもネオスピーシアンなら簡単に破る事が出来るが…。あいつが遊戯を優先してくれないと色々と拙い。)

間違いなくマリクに目を付けられた現状を鑑みて、最悪の方向に進んでいく考えを振り払う様に頭を振り、再び足を進める。

??? SIDE

PM1:07、尾瀬呂港(童実野町より東80キロの地点)...

そこに褐色の肌の少年がその地へと降り立つ。彼こそは『マリク』
『イシュタル』…グールズの首領であり、千年アイテムの一つ『千
年ロッド』の現代での所持者。

そう、『海馬瀬人』と並んで『龍牙が係わり合いになりたくない原
作キャラ』のトップに位置する少年である。

「お待ちしておりました、マリク様。」

倉庫の様な場所の中に作られた港に立つ黒いローブを纏った男達の
一人がマリクへとそう告げる。

「準備は出来ているな。」

「はい。」

マリクの問いに一人が答える。

「これが決闘盤です。」
デュエル・ディスク

「……………」

今まで決闘盤を持ち、控えていた男がマリクへと決闘盤を差し出す。
デュエル・ディスク

「へー。ワリと軽いんだね…。」

受け取った決闘盤を持ちながらそんな感想をいい、停められている
デュエル・ディスク
バイクへと近付いていく。

「しかし…マリク様が自らバトル・シティに出向かれるとは…。街

には腕のたつレア・ハンターも待機しておりますが…。」

「ボクに言う前にまず、こいつを説得してくれないか！ 『神のカード』の入った、このデッキに！ フフ…。」

部下の言葉に最強の神のカードの入った自身のデッキを見せバイクに跨り、そう答える。

「それに…ジツとしていると自分が決闘者である事を忘れてしまいそうだね。」

デュエル・ディスク
決闘盤を取り付けられたバイクのエンジンを動かし、エンジン音を鳴り響かせる。

「童実野町まではここから一時間ほどの距離かと。」

「ン…。なら40分だな…。現在の二人の所在地は……………？」

イーブロック
「武藤遊戯はE地区地点を西に進んでいます。緋天龍牙はA地区地点を南に進んでいます。」

「あまり彼らを待たせて、退屈な時間を与えても可哀相だし…。バトル・シテイ
童実野町に到着するまで遊戯とはボクが一戦、相手してやるか…。それに龍牙には『亜神』を持つ最強のレア・ハンターをぶつけるとしよう。」

マリクの言葉に二人の部下はその表情に驚愕を浮かべる。

「人形と『あの少女』を動かすのですか!?!」

「ああ…。その為に人形は二日間、街の真ん中に設置していたんだからな。それに『彼女』は幸にも童実野町に住んでいるからね。」

既に『本編』からストーリーは大きく離れている事を龍牙はまだ知らない。『ネオス』と『D』のカードの他に本来なら存在しないはずのカード達の存在とそれを所持する決闘者^{デュエリスト}の存在を…。

S I E D アウト

「…なんだ…なんか、物凄く嫌な予感がする…。」

適当なビルの壁に背中を預けてデッキの確認中の龍牙は…そんな事を呟いた。

自分の記憶通りのストーリーで進んでいくなら、そろそろマリクの人形が動く頃なのは予測できる。その為に神対策のカードとなるカードを確認し、決闘盤にセットしなす。

「…原作通りの神を相手にするとしたら、これじゃあ勝率は10%って所か。」

用意しているもう一組のカードの束へと視線に向け、そのカードを使うべきかと考えるが直に頭の中からその考えを消す。

「…こっちのHEROを使うのはまだ早いかな。」

今後の切り札となる強力な効果を持った数枚のHEROのカード。だが、それを使うのはまだ早いという判断をする。

「…最悪の事態（決勝進出）までパズルカードはあと三枚か…。一歩間違えば間違いなく命懸けだからな…バトル・シティの決勝って…マリクとかラーの相手は…。」

思わず何度目かは分からない眩きを漏らしてしまう。そして、思い出すのは…つい先日…自分が童実野町^{こじち}に来た先日の『彼女』との約束。

「そう言えば…あいつと約束してたんだよな…。まさかとは思うけど…あいつまで童実野町^{こじち}にいるんじゃないのか？」

彼女が持っているのは自分の持つ『E・HERO』のライバルである『ブラッドヒーロー』を中心とした運命の英雄『D・HERO』達…そのデッキ自身大半のカードは自分が送ったプレゼントなのだから、デッキの傾向は分かる。

（…待てよ…。オレの『E・HERO』のカードがオレしか所持していないカードだとしたら、『D・HERO』もあいつだけが持っているカードになるよな…？）

マリクの言葉を思い出しながらそんな考えを浮かべていく…。

（…もし、あいつもここに居るとしたら、あいつも狙われる可能性もある…。探した方がいいか…決勝まで進む気は無いし。…）

「あの…。」

『それに時間を取られた所で決勝進出の意思は無いのだから大丈夫』と、そう結論付けて今後の活動方針を定め、歩き始めようとした時、龍牙の後ろから声が掛かる。

『またレア・ハンターか？』とも考えてしまいが、声に込められている意思が、今までの無駄に威圧的と言うか偉そうだったレア・ハンター（名無し）達と違って何処か弱々しい。

「えーと…なにか用？」

龍牙が振り向くと黒いロングヘアの何処か気の弱そうな少女が居た。腕につけているデュエル・ディスクがなければ何処から見てもデュエリストとは分からないだろう。

「あ、はい。私とデュエルして貰えますか？」

（グルズ相手の絶対に負けられない様なデュエルが続いてたし、妙な事情無しのデュエルを楽しむのもいいよな。）

そんな事を考えて、目の前の少女に挑まれた決闘デュエルに応じる。

「ああ、いいけど。君も出場者？」

「はい。」

龍牙と少女の二人は互いに距離をとりデッキをセットしたデュエル・ディスクを起動させる。

「あ、私、『久遠 雫』と言います。」

「ああ、オレは緋天龍牙。」

「はい、知っています。」

彼女…雫の言葉に何処か引つ掛る物を感じながらも、龍牙は自分の疑問に対して答えを出す事が出来なかった。

「（知ってる？ オレはそんなに有名なのか？）それで、パズルカードとレアカードは何枚賭ける？ 別にレアカードは無くてもいいけど…。」

「じゃあ、一枚ずつお願いします。先攻はそちらからどうぞ。」

「ああ。」

「「デュエル!!!」」

龍牙	LP 4000
雫	LP 4000

龍牙の手札

E・HEROフェザーマン

E・HEROクレイマン

O・オーバーソウル

ヒーローシグナル

闇の量産工場

「オレのターン、ドロー!」

ドローカード『融合回収』

（…モンスターは二枚か…なら、このカードだ。）

「E・HEROクレイマンを守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

龍牙のフィールド上に巨体を持つゴーレムをイメージさせるモンスター『E・HEROクレイマン』が守備体制を取り、カードが一枚伏せられる。

龍牙 LP4000

フィールド

E・HEROクレイマン 守備力2000

伏せカード一枚

ヒーローシグナル

手札4枚

E・HEROフェザーマン

O-オーバーソウル

闇の量産工場

融合回収

「私のターン、ドロー。私は…。」

雫がカードをデュエル・ディスクにセットした瞬間出現した『宝玉の原石』に対して龍牙は思わず驚きを露にってしまう。

（なに！？）

「『宝玉獣 アメジストキャット』を攻撃表示で召喚します。」

零のフィールドに出現したモンスターはアメジスト紫水晶が埋め込まれた『宝玉獣』の一体『宝玉獣 アメジストキャット』。本来のストーリーなら、龍牙のE・HEROよりも更にこの時点では『存在していないはずのカード』なのだ。

（ちょっと待て、何で…宝玉獣がいる！？）

「アメジストキャットの効果でダイレクトアタックします。ダメーシは半分ですけど。」

龍牙の驚愕を知ってか、知らずか？ 彼女のフィールドに出現したアメジストキャットは龍牙のクレイマンと伏せカードを飛び越えて、龍牙にその爪を振り下ろす。

「くっ。」

龍牙 LP 4000 ↓ 3400

（…先手を取られたか…。しかし、この分だとあの子のデッキには宝玉神のカードまで入っているよな。…オレのE・HEROに宝玉獣、あいつが居たとしたらD・HEROまで存在するはず…まさかとは思っけど…『幻魔』まで居るんじゃないよな？）

「それから、カードを一枚伏せてターンエンドです。」

龍牙 LP3400

フィールド

E・HEROクレイマン 守備力2000

伏せカード一枚

ヒーローシグナル

手札4枚

E・HEROフェザーマン

O・オーバーソウル

闇の量産工場

融合回収

零 LP4000

フィールド

宝玉獣 アメジストキャット 攻撃力1200

伏せカード一枚

手札4枚

「オレのターン、ドロー！」

ドロークカード『E・HERO ワイルドマン』

「オレはワイルドマンを攻撃表示で召喚！ そして、ワイルドマンでアメジストキャットを攻撃する！」

龍牙の攻撃宣言に応じてワイルドマンが大剣を振り上げ、零のフィールドに在るアメジストキャットを切り裂く。

「貴方の攻撃宣言で畏カード発動『ラスト・リゾート』。」

雫 LP4000 ↓ 3700

アメジストキャットが切り裂かれると同時に雫のデュエル・ディスプレイにフィールド魔法がセットされ、景色が古代遺跡の様な物へと一新される。

「この効果で、私のフィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』が発動されました。それから私の宝玉獣は破壊された時、永続魔法扱いでフィールドに残ります。」

ワイルドマンの攻撃で破壊されたアメジストキャットは雫のフィールドに紫水晶の宝玉の形で残る。

（レインボー・ルインの効果は永続魔法扱いの宝玉獣の数で増えていく、これで魔法効果でレインボー・ルインを破壊する事は出来な
いか。）

「ターンエンドだ。」

龍牙 LP3400

フィールド

E・HEROクレイマン 守備力2000

E・HEROワイルドマン 攻撃力1500

伏せカード一枚

ヒーローシグナル

手札4枚

E・HEROフェザーマン

O・オーバーソウル

闇の量産工場

融合回収

雫 LP3700

フィールド

無し

伏せカード無し

宝玉獣 アメジストキャット（永続魔法扱い）

手札4枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「私のターン、ドロー。私は『宝玉獣 サファイア・ペガサス』を攻撃表示で召喚します。」

雫のフィールドに現れたサファイアの原石が砕け散り、翼にサファイアの宝石を持ち、ユニコーンの角の様にサファイアの角を持つペガサス『宝玉獣 サファイア・ペガサス』が召喚される。

「サファイア・ペガサスを効果発動します。サファイア・コーリン
グ！」

サファイア・ペガサスの宝石の輝きに照らされ、雫のフィールドにアメジスト
紫水晶の宝玉の隣に黄玉の宝玉が現れる。

「それから、手札の『宝玉の導き』の魔法カードを発動します。その効果で『宝玉獣 ルビー・カーバンクル』を特殊召喚。」

サファイア・ペガサスの隣に現れた紅玉ルビーの原石が砕け散り、尻尾と尻尾にルビーを付けた可愛い小動物を召喚する。

「ルビー・カーバンクルの効果発動、ルビー・ハピネス！」

ルビー・カーバンクルの宝玉から放たれた光が雫のフィールドの宝玉、アメジストと黄玉を照らした瞬間、砕け散り、アメジストと黄玉をあしらった白虎の姿をしたモンスター『宝玉獣 トパーズ・タイガー』が召喚される。

「最後に魔法カード『宝玉の開放』をサファイア・ペガサスに装備します。トパーズ・タイガーでワイルドマンに、サファイア・ペガサスでクレイマンに攻撃します。」

龍牙 LP 3400 ↓ 2900

「罨カード『ヒーロー・シグナル』発動！ 『E・HERO スパークマン』を攻撃表示で召喚！」

残る二体のモンスター、アメジストキャットとルビー・カーバンクルの攻撃から龍牙を護るように彼の前に立つ。

「じゃあ、アメジストキャットの効果でダメージを与えて、ターンエンドです。」

サファイアキャットがモンスターを飛び越え龍牙のライフを削り取る。

龍牙 LP2900 ↓ 2300

龍牙 LP2300

フィールド

E・HERO スパークマン 攻撃力1600

伏せカード

無し

手札4枚

E・HERO フェザーマン

O・オーバーソウル

闇の量産工場

融合回収

零 LP3700

フィールド

宝玉獣 サファイア・ペガサス（＋『宝玉の開放』） 攻撃力1800（＋800）

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻撃力1600

宝玉獣 アメジストキャット 攻撃力1200

宝玉獣 ルビー・カーバンクル 攻撃力300

伏せカード無し

宝玉の開放（サファイア・ペガサスに装備）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

相手フィールド上には四体の宝玉獣、それに対して自分のフィールド

ドにはスパークマンが一体、手札のカードは三枚の魔法カードと通常モンスターが一枚程度。だが、

（いいな…この状況…。レア・ハンターとは違うこの感覚…楽しいデュエルだ。）

思わず笑みを浮かべてしまう。レア・ハンターとのデュエルとは違う楽しめる決闘^{デュエル}、全てはそれに対しての心からの笑み。

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『融合』

「よし、魔法カード『O・オーバーソウル』を発動、クレイマンを特殊召喚！ 更に…『融合』発動！ 来い、『E・HERO サンダー・ジャイアント』！」

フィールドに戻ったクレイマンとフィールドに存在していたスパークマンの姿が重なり合い、新しい姿を作り上げる。

「サンダー・ジャイアントの特殊効果、手札を一枚捨てて…ヴェイパー・スパーク！」

サンダー・ジャイアントの打ち下ろした拳から放たれる雷がサファリア・ペガサスを宝玉へと変え、同時にコバルトの宝玉が彼女のフィールドに現れる。

「宝玉の開放の効果でデッキから永続魔法扱いで『宝玉獣 コバルトイーグル』を召喚させて頂きました。」

（これで宝玉は五つ…あとは琥珀^{アンバー}と翠玉^{エメラルド}の二つで七つ揃うか。）

「サンダー・ジャイアントでアメジストキャットに攻撃…ボルテックス・サンダー！」

サンダー・ジャイアントの攻撃によってアメジストキャットが紫水晶^{アメジスト}の宝玉へと変わり、サファイアとコバルトの宝玉と並ぶ。

零 LP 3700 ↓ 3100

「レインボー・ルインの効果で戦闘ダメージは半分になりました。」

手札のモンスターカードはフェザーマンの一枚だけ、召喚した所で壁にもならない…。なら、自分の取るべき選択肢は一つ。ターンエンドを宣言しようとして彼女へと視線を向けた時、その表情が目にとまった。

「ターンエンドの前に一つ聞いていいか？」

「？ 私に答えられる事なら、いいですけど。」

「…零さん…君は…なんでそんなに『辛そうに』にデュエルをしているんだ？」

「っ！？」

龍牙の言葉に彼女に明らかな同様が浮かぶ。

「そ、そんな事…貴方には関係ない！」

「そうだな…。でもさ、そんな誰かに強制されている様に辛そうなんだ？」

「…私は…本当は…こんな事したくない…。こんな風になんか戦いたくない…。でも…彼が許してくれない！！…貴方のカードを持っていけば開放してくれるって彼は言ってた！…だから…。」

龍牙の言葉に雫は何が崩壊した様に叫ぶ。そして、龍牙には彼女の言葉に出てくる『彼』に心当たりが一つだけある。

「…『マリク』か…？」

「え？」

「…君がオレにデュエルを挑んだのも、マリクの命令か？」

「…彼を知ってるの…？　そうよ…だから、お願いだから…私に負けてえ！！！！」

既に龍牙のターンは彼女が話を終えた瞬間に終了している。そして、雫は叫びながらカードをデッキからドロ―する。

決闘05：

龍牙 LP2300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

伏せカード

無し

手札2枚

E・HERO フェザーマン

融合回収

零 LP3100

フィールド

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻撃力1600

宝玉獣 ルビー・カーバンクル 攻撃力300

伏せカード無し

宝玉獣 アメジスト・キャット（永続魔法扱い）

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 コバルト・イーグル（永続魔法扱い）

手札3枚

フィールド魔法 『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「私は手札から魔法カード『レア・ヴァリユール』を発動します。魔法・罨ゾーンの貴方の選択した宝玉獣を墓地に送る事でカードを二

枚ドロします。」

「アメジスト・キャットを墓地に送る。」

龍牙の選択した紫水晶の宝玉が砕け散り、^{アメジスト} 雫はカードを二枚ドロする。

「私は手札から魔法カード『宝玉の導き』を発動します。その効果でデッキから『宝玉獣 アンバー・マンモス』を攻撃表示で召喚します。それから、カードを一枚伏せて、ターンエンドです。」

龍牙 LP 2300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

伏せカード

無し

手札2枚

E・HERO フェザーマン

融合回収

雫 LP 3100

フィールド

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻撃力1600

宝玉獣 ルビー・カーバンクル 攻撃力300

宝玉獣 アンバー・マンモス 攻撃力1700

伏せカード一枚

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 コバルト・イーグル（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「オレのターン、ドロー。」

ドローカード『強欲な壺』

「手札から魔法カード強欲な壺を発動して二枚ドロー。」

ドローカード『ドレインシールド』 『沼地の魔神王』

（相手の宝玉は六つ…エメラルド・タートルが出たら間違いなく、究極宝玉神が来る。手札は沼地の魔神王とフェザーマン、ドレイン・シールドを伏せておくとして…あとは『融合回収』だけか…。）

融合によって墓地に送ったモンスターとフェザーマンとの融合で召喚できる融合モンスターを一つ一つ上げていくが、この先の究極宝玉神と対峙した状況で力を発揮してくれるモンスターは…。

（…いや、待て。）

手札のカードに視線を向け、その中の一枚『沼地の魔神王』へと視線を向ける。

（沼地の魔神王はデッキから融合を手札に加えるだけじゃない、融合素材の代用になる効果を持ったE・HEROとの相性が最高のカード。だったら、組み合わせは…。よし！）

そう考えた瞬間、龍牙の頭の中に一枚の絵が浮かび上がる。それは『光炎を纏う戦士』…最強の『E・HERO』の一枚。

（問題はレインボー・ルインの効果か…。）

宝玉が魔法・罨ゾーンに有る時のレインボー・ルインには『魔法・罨の発動を無効にする』効果を得てしまうのだ。もともと、それには宝玉獣一体をフィールドから墓地に送る必要が有り、無制限ではないが。

（温存して融合回収か融合の効果が無効にされたら意味は無いか。だったら、早い内に切り札を出す。）

「手札から魔法カード『融合回収』を発動、墓地の『E・HEROスパークマン』と『融合』を手札に戻して、『融合』を発動！」

龍牙の手札の沼地の魔神王が人型へと姿を変えて、スパークマンと混ざり合う。

「手札の『E・HERO スパークマン』と『沼地の魔神王』を融合。現れる…『E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン』！」

光り輝く鎧を纏って龍牙の現れるのは龍牙の持つE・HEROの中の最強の切札の一枚『E・HERO シャイニング・フレア・ウィ

ングマン』。

「シャイニング・フレア・ウィングマンは墓地のE・HERO一枚につき攻撃力が300ポイント上昇する。」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン
攻撃力2500 ↓ 2800 ↓ 3100 ↓ 3400

龍牙の墓地に存在するE・HEROは『スパークマン』『クレイマン』『ワイルドマン』の合計三枚、それによって自身の効果によって合計900ポイント、攻撃力が上昇する。

（宝玉獣はシャイニング・フレア・ウィングマンのダメージを与える効果を防ぐ事はできる。だけど、攻撃表示なら…。）

「シャイニング・フレア・ウィングマン、アンバー・マンモスに攻撃！ シャイニング・シュート！」

「そうはさせません、罠カード『攻撃の無力化』！」

アンバー・マンモスへと振り下ろされそうになるシャイニング・フレア・ウィングマンの光を歪む空間が吸収し、アンバー・マンモスへと届く事無く、その攻撃は消滅した。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ。」

龍牙 LP2300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力25

00 ↓ 3400

伏せカード

ドレインシールド

手札1枚

E・HERO フェザーマン

雫 LP3100

フィールド

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻撃力1600

宝玉獣 ルビー・カーバンクル 攻撃力300

宝玉獣 アンバー・マンモス 攻撃力1700

伏せカード無し

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 コバルト・イーグル（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

（…やだ…私の大切な『宝玉獣』のカードは失いたくない…。あの人は約束してくれた…。あの人に従っていれば宝玉獣は奪われない…。だから…お願い…。来て…。私の宝玉獣。）

「私のターン、ドロー！」

そのカードをドローした瞬間、雫の表情が変わる。

（まさか、最後の^{エメラルド}翠玉の宝玉獣？）

「私は手札の『宝玉獣 エメラルド・タートル』を守備表示で召喚します。」

雫のフィールドに現れた^{エメラルド}翠玉の宝玉が砕け散り、エメラルドの甲羅を持つ亀…最後の宝玉獣『エメラルド・タートル』が現れ、守備体制として甲羅の中に籠る。

「トパーズ・タイガー、ルビー・カーバンクル、アンバー・マンモスを守備表示に直して、ターンエンドです。」

（これで、あとは…私の切り札を引ければ…。）

流れこそまだ龍牙に有るが、相手のフィールドと墓地には遂に七種の宝玉獣が揃ってしまった。そして、ライフを削る為に攻撃しても少なくとも、ダメージを与えるには後二ターンは掛かってしまう。

（…相手はもう『究極宝玉神 レインボー・ドラゴン』の召喚条件を満たしたか。この時点でもう『宝玉獣』が有るんだ。無いかもしれない何て言う曖昧な予想より、有ると考えていた方が良さそうだ

な。」

「オレのターン、ドロー！」

この決闘の流れは雲の方に流れつつあるのだ。既に召喚条件を満たしてしまっている以上、レインボー・ドラゴンを召喚された瞬間、完全に雲が逆転する。

ドローカード『E・HERO エアーマン』

(…エアーマンか…。まだ出すべきじゃないな。)

「オレは『E・HERO フェザーマン』を攻撃表示で召喚。」

龍牙のフィールドに新たに現れたのは緑色の羽と翼を持つHERO『フェザーマン』。

「サンダー・ジャイアント、アンバー・マンモスを攻撃！」

サンダー・ジャイアントの振り下ろす雷を纏った拳がアンバー・マンモスに叩きつけられ、雲の魔法・罨ゾーンに宝玉として現れる。

「シャイニク・フレア・ウィングマンで、トパーズ・タイガーに攻撃！」

シャイニク・フレア・ウィングマンの全身から放たれる光がトパーズ・タイガーを飲み込み、宝玉へと姿を変える。本来なら、効果でダメージを与えたい所だが。

「残念ですけど、宝玉獣は魔法・畏ゾーンに送られたので効果ダメージは有りません。」

彼女の宣言どおり、宝玉獣は墓地に送られずに魔法・畏ゾーンに送られる効果を持つ。故にシャイニング・フレア・ウイングマンの効果によるダメージは発生しない。

「フェザーマン、ルビー・カーバンクルを攻撃！」

最後にフェザーマンの放つ羽が手裏剣の様にルビー・カーバンクルに突き刺さり、宝玉へと姿を変えた。

「ターンエンドだ。」

龍牙 LP 2300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻撃力25

00 ↓ 3400

E・HERO フェザーマン 攻撃力1000

伏せカード

ドレインシールド

手札1枚

E・HERO エアーマン

雫 LP3100

フィールド

宝玉獣 エメラルド・タートル 守備力2000

伏せカード無し

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 コバルト・イーグル（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

宝玉獣 ルビー・カーバンクル（永続魔法扱い）

宝玉獣 アンバー・マンモス（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

（…手札に私の切り札は無い…。でも、私にはレインボー・ルインの効果が有るから、手札にあのカードが来るまで護りきれ。でも、お願い…早く来て。）

龍牙のフィールド上に有る三体の『E・HERO』達を見て、何時までも守り切れる物では無いと判断する。ならば、一刻も早く自身の切り札を召喚するしかないと考える。

「私のターンです、ドロー！」

ドローしたカードを見た瞬間、雫の表情が変わる。だが、その表情は待ち続けていた切り札が来たという喜びの表情でもなければ、まったく役に立たないカードが来たという落胆の表情でもない。一言で表現するならば、その表情は『疑惑』の一言に尽きる。

（え？ なに…これ？ こんなカード…私、知らない。）

『へー…『亜神』を引き当てる前にそのカードを引くなんてね。』

「え？」

突然の声に驚きながら周りを見回しても、周りには誰も居ない。逸れに対して疑問に思うよりも先に一つの可能性に辿り付き、雫は表情を変える。

「おい、どうしたんだ!？」

雫の行動を疑問に思いながら、龍牙がそう問いかけるが彼の言葉は雫には届いていない。

『…そのカード『幻魔』は、君のデッキとの相性も悪くないし、それはボクが君をバトル・シテイへ参加させる前に入れておいたカードだ。』

「イヤ…。」

『安心していいよ、彼とはボクが手伝ってあげるから。だから、君には少し眠っていて貰うよ。』

雫の頭の中に響く声がそう告げた瞬間、彼女の意識は途切れていく。

「なんだ？」

急に雰囲気が変わった雫を疑問に思いながら、そう呟く龍牙を無視

して『零』は先ほどドロ―したカードをデュエル・ディスクへとセツトする。

「『ボク』は三枚の永続魔法を生贄に。」

ルビー、コバルト、アンバーの宝玉が凍りつき、三本の氷柱を作り出した瞬間、それが砕け散りその中から禍々しい黄金の翼を持った巨大なモンスターがその姿を現した。

『それ』の持つ威圧感、その存在感は神のカードにも匹敵し、その禍々しさは神とは別の存在であると告げている。

（っ！？ 嘘だろう！？ あれは…まさか…。）

そう、龍牙はそのモンスターの事を知っている。バトル・シティの時には『間違いなく』存在していないはずのモンスター。…『神』に対する『魔王』とも言うべきモンスター『三幻魔』の一体。

（『三幻魔』…『降雷皇』……『降雷皇ハモン』！！！？）

「『降雷王ハモン』攻撃表示で召喚！！！」

奇しくも、龍牙の声に出さない叫び声が響いた瞬間、同時に『零』のモンスターの『名』の宣言と降雷皇ハモンの咆哮は同時に響き渡った。

龍牙 LP2300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力25

00 ↓ 3400

E・HERO フェザーマン 攻撃力1000

伏せカード

ドレインシールド

手札1枚

E・HERO エアーマン

零 LP3100

フィールド

宝玉獣 エメラルド・タートル 守備力2000

降雷皇ハモン 攻撃力4000

伏せカード無し

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「降雷皇ハモンの攻撃…『失楽の霹靂』！！！！」

降雷皇ハモンの咆哮と共に天空より撃ち出された雷が龍牙のフィールドのフェザーマンへと降り注ぐ。

「っ！？ 罨カード発動『ドレインシールド』!!!!」

『罨』の攻撃宣言により発生した降^{ハモン}雷皇の二度目の咆哮により正気に戻ると、龍牙は慌てて罨カードを発動させ、その攻撃を吸収する。

龍牙 LP 2300 ↓ 6300

（危なかった…今の攻撃が通っていたら、負けていた。）

「惜しい、惜しい。君の伏せカードが無かったら今ので勝負は付いてただけだね。」

大きく回復するライフとは裏腹に焦りの表情を浮かべる龍牙に愉快そうな『罨』の言葉が届く。

「…そのカードは…なんだ…『マリク』？」

急に変わった雰囲気と口調、そして、額に浮かび上がっているヴィジャト眼。そこから考え出される可能性を告げる。そして、自分の対峙しているそのカードの能力は良く知っている。だが、ここは驚いていた方がいいと判断して、そう告げておく。

「また会ったね、龍牙。」

心の中で『絶対に会いたくなかった』と考えているとは悟られない

様に『零』から告げられるその言葉に睨み返すことで返す。

「このカードは『幻魔』…ボクがバトル・シティに仕掛けておいた『対神用』のデッキの切り札さ。」

「…万が一、神のカードが奪われた時のために仕掛けておいた罠とでも言うのか？」

「その通りだ。勘がいいね、君は。彼女は実力も有るんだけど、闘争心が弱くてね、だから、彼女には仕掛けをさせて貰ったのさ。ターンエンド。」

ターンエンドの宣言と共にヴィジャト眼が消え去り、それがマリクが去った事を告げている。だが、彼女の纏っている雰囲気は別人の様に今までの物とは変わり続けていた。

龍牙 LP 6300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力2400

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力25

00 ↓ 3400

E・HERO フェザーマン 攻撃力1000

伏せカード無し

手札1枚

E・HERO エアーマン

零 LP 3100

フィールド

宝玉獣 エメラルド・タートル 守備力2000

降雷皇ハモン 攻撃力4000

伏せカード無し

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『カップ・オブ・エース』

「手札から魔法カード『カップ・オブ・エース』を発動。」

龍牙と『零』の間に現れたコインが舞い上がり、表の面を見せる。

「表の効果はオレが二枚のカードをドロー。」

ドローカード『ネオスベーションN・フレア・スカラベ』『コンバート・コンタクト』

「手札から更に『コンバート・コンタクト』を発動、手札とデッキのネオスペーシアンを一枚ずつ墓地に送り、カードを二枚ドロ―。オレは手札のフレア・スカラベとデッキのグラン・モールを墓地に送る。」

ドロ―カード『ヒーロー・バリア』『E・HEROネクロダークマン』

（ネクロ・ダークマン…サンダー・ジャイアントの効果で墓地に送れば3700までシャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は上昇するけど、まだ少し足りない。キャプテン・ゴールドでやつと4000と言った所か？）

「フェザーマン、サンダー・ジャイアント、シャイニング・フレア・ウイングマンの三枚を守備表示にして、カードを一枚伏せる。ターンエンドだ。」

「私のターン、ドロ―。」

意思を感じさせない光を映さない瞳と抑揚の無い声でそう呟き『雷』は自分のデッキからカードをドロ―する。

「降雷皇ハモンでフェザーマンを攻撃、失楽の霹靂！」

咆哮と共に天空より撃ち出した降雷皇ハモンの雷がフェザーマンを跡形も無く破壊する。

「降雷皇ハモンの効果、『地獄の贖罪』。」

天空より降り注いだ雷が龍牙を打ち抜き、ライフを1000削る。

「ぐっ。」

龍牙 LP 6300 ↓ 5300

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500 ↓ 3700

「降雷皇ハモンは戦闘で相手モンスターを破壊して墓地に送った時、1000ポイントのダメージを相手に与える。ターンエンド。」

「オレのシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力も3700に上がる。オレのターン、ドロー！」

龍牙 LP 5300

フィールド

E・HERO サンダー・ジャイアント 守備力1500

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 守備力2100（攻撃力2500 ↓ 3700）

伏せカード

ヒーロー・バリア

手札1枚

E・HERO エアーマン

E・HERO ネクロ・ダークマン

雫 LP 3100

フィールド

宝玉獣 エメラルド・タートル 守備力2000

降雷皇ハモン 攻撃力4000

伏せカード無し

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

手札3枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

ドローカード『ミラクル・フュージョン』

「サンダー・ジャイアントの効果発動！ 手札を一枚捨てて、相手フィールド上の元々の攻撃力がサンダー・ジャイアントより低いモンスターを破壊する。ヴェイパー・スパーク！」

守備体制のサンダー・ジャイアントの放つ雷がエメラルド・タートルを打ち抜き、エメラルドの宝玉へと姿が変わる。そして、それと同時に守備体制を取っていたシャイニング・フレア・ウィングマンの輝きが更に強さを増す。

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500
↓3700 ↓4000

「オレの捨てたカードは『E・HERO ネクロ・ダークマン』。
これでオレの墓地の『E・HERO』は合計五枚、攻撃力は400
0に上昇。これでハモンと攻撃力は並んだ。シャイニング・フレア・
ウィングマンを攻撃表示に戻して、ターンエンドだ。」

龍牙のフィールドのシャイニング・フレア・ウィングマンが守備体
制を解き、攻撃態勢を取る。

「私のターン、ドロー。降雷皇ハモン、サンダー・ジャイアントを
攻撃、失楽の霹靂。」

攻撃力の上昇するシャイニング・フレア・ウィングマンの存在を無
視し、『雫』は龍牙のフィールドのサンダー・ジャイアントをハモ
ンの雷によって打ち抜く。

「地獄の贖罪。」

続いて打ち出された雷が龍牙を打ち抜く。

龍牙 LP 5300 ↓ 4300
E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力25
00 ↓ 4300

「カードを二枚伏せ、ターンエンド。」

「オレのターン、ドロー。」

龍牙 LP 4300

フィールド

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500
↓4300

伏せカード

ヒーロー・バリア

手札2枚

E・HERO エアーマン

ミラクル・フュージョン

雫 LP 3100

フィールド

降雷皇ハモン 攻撃力4000

伏せカード二枚

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

宝玉獣 エメラルド・タートル（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

今のターン、『雫』がサンダー・ジャイアントを破壊した時、完全に戦況は逆転した。シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は既に4300と完全に降雷皇ハモンの攻撃力を300上回っている。シャイニング・フレア・ウィングマンのもう一つの効果と組み合わせれば、既に龍牙のほぼ勝利は確定している。

(…気になるのはあの二枚の伏せカードか…。)

ドローカード『ホープ・オーバー・ファイブ』

(…今のタイミングで使ったら逆に不利になるな。)

墓地のE・HEROを五枚もデッキに戻したら、それはシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力が1500のマイナスとなる。

(せっかく、降雷王を倒す好機が回ってきたけど、今の雫さんを相手にしたら、あのカードがブラフとは考えにくい。手札はミラクル・フュージョンとエアーマンを含めた三枚、伏せカードはヒーロー・バリア、攻撃した場合、オレに出来る最善の策は…。)

エアーマンの効果による魔法・罠カードを破壊できるのは一枚のみ、確立は二分の一、いや、最悪の場合、どちらを破壊したとしても状況は変わらないかもしれない。

(エアーマンとハモンの攻撃力の差は2200…合計でダメージは3200…最悪の場合、ギリギリまでダメージを抑えられるのは。)

「シャイニング・フレア・ウィングマン、降雷皇ハモンを攻撃!!
! シャイニング・シュート!!!」

背中シャイニング・スモーク・ウィングマンの翼を広げ、光を纏う戦士は降雷皇へと一直線に向かっていく。

「降雷王ハモン迎撃、失楽の霹靂。」

『雫』の命令に従い、迎撃の雷を放つ降雷皇ハモン。そして、その

中央で激突するシャイニング・フレア・ウィングマンと激突した瞬間、爆炎が舞い上がる。

「シャイニング・フレア・ウィングマン！ 何！？」

龍牙が自身の切り札の名前を叫んだ瞬間、彼の体をハモンの雷が打ち抜き、ライフを大きく削り取る。

龍牙 LP 4300 ↓ 2900

そして、爆煙の中から『赤、橙、黄、緑、青、藍、紫』の七色の光が伸び、一体の龍を形作る。

「嘘…だろう？ まさか…。」

爆煙が消え去り、その中から現れたのは…無傷の『降雷皇ハモン』ともう一体の新たなモンスターの姿だった…。

神に匹敵する力を持つ虹色のモンスター、そのモンスターの名は『究極宝玉神 レインボー・ドラゴン』。

「どうして、レインボー・ドラゴンまで。」

並び立つ魔と亜神…龍牙と対峙するのは…神にも匹敵する二体のモンスター達。

決闘06：

「まさか…あの二枚の伏せカード…やっぱり、『突進』と『虹の引力』の二枚か。」

ソリットビジョンの爆煙が消え去り、『雫』のフィールドで表になっている二枚のカード。

攻撃力を700ポイント上昇させる速攻魔法『突進』とデッキと墓地から『究極宝玉神 レインボー・ドラゴン』を特殊召喚させる『虹の引力』。シャイニング・フレア・ウィングマンを攻撃力を上げて迎撃し、同時に『虹の引力』によってレインボー・ドラゴンの特殊召喚を狙っていたのだ。

このターン、龍牙の起こした最大のミスはエアーマンの効果で片方のカードを破壊出来なかった事、『突進』を破壊できていれば自分は勝利していたのだ。

「くっ。E・HEROエアーマンを守備表示で召喚、効果でデッキから『E・HEROネオス』を手札に加えて、ターンエンドだ。」

龍牙 LP2900

フィールド

E・HERO エアーマン 守備力300

伏せカード

ヒーロー・バリア

手札3枚

E・HEROネオス

ミラクル・フュージョン
ホープ・オーバー・ファイブ

零 LP3100

フィールド

降雷皇ハモン 攻撃力4000

究極宝玉神レインボー・ドラゴン 攻撃力4000
伏せカード無し

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

宝玉獣 エメラルド・タートル（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「私のターン、ドロー。ハモンで攻撃。失楽の霹靂。」

「罨カード発動、『ヒーロー・バリア』！」

守備体制を取っていたエアーマンの前に現れた光のバリアがハモンの放つ雷を防ぐ。

「レインボー・ドラゴン…攻撃、オーバー・ザ・レインボー。」

レインボー・ドラゴンの口から放たれる七色の光が龍牙のフィールドのエアーマンを跡形も無く破壊する。

「カード一枚伏せてターンエンド。」

龍牙 LP2900

フィールド

伏せカード

無し

手札3枚

E・HEROネオス

ミラクル・フュージョン

ホープ・オーバー・ファイブ

零 LP3100

フィールド

降雷皇ハモン 攻撃力4000

究極宝玉神レインボー・ドラゴン 攻撃力4000

伏せカード一枚

宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（永続魔法扱い）

宝玉獣 エメラルド・タートル（永続魔法扱い）

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「オレのターン、ドロー！」

ドロークカード『攻撃の無力化』

「手札から、魔法カード『ミラクル・フュージョン』発動。墓地のスパークマンと沼地の魔神王をゲームから除外して、もう一度、シャイニング・フレア・ウィングマンを特殊召喚！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500
0↓4300

これによって再び龍牙のフィールドにシャイニング・フレア・ウィングマンが召喚され、その攻撃力はハモンとレインボー・ドラゴンを上回る。

（どうする？ オレが選択肢としては攻撃できるのはハモンだけ。効果でフィールドの三枚の宝玉獣を破壊されたら、その場で攻撃力は7000まで上昇する。万が一また『突進』だった場合はまた1400のダメージか。）

「畏カード『威圧する咆哮』。」

「くっ。ターンエンド。」

龍牙が思案する中、『雫』が伏せカードを表にし、龍牙の攻撃宣言を封じる。今までの決闘の傾向から、判断すると宝玉獣とそのサポートカード以外のカードの大半が防御に優れている事が伺える。こちらの攻撃の好機^{チャンス}を立て続けに潰され、相手のターンでは向こうの強力なモンスターの攻撃を防ぐのがやっとなのだ。

「私のターン、ドロー。レインボー・ドラゴン効果発動。レインボー・オーバー・ドライブ。」

『零』の宣言に合わせてフィールド上の宝玉三つが砕け散り、そこから零れ出した三色の光がレインボー・ドラゴンの体に有るそれぞれの光に対応した宝玉が輝きを増す。

究極宝玉神レインボー・ドラゴン 攻撃力4000 ↓ 7000

「レインボー・ドラゴン攻撃、オーバー・ザ・レインボー。」

「攻撃の無力化！」

渦を巻いて龍牙のフィールドのシャイニング・フレア・ウィングマンへと襲い掛かる三色の光を龍牙の罨カードの作り出した魔力の渦の中に飲み込み、無力化する。

「手札から魔法カード『魂の開放』発動。貴方の墓地のシャイニング・フレア・ウィングマン、サンダー・ジャイアントを、私の墓地からサファイア・ペガサス、トパーズ・タイガー、アンバー・マンモスをゲームから除外。カードを一枚伏せてターンエンド。」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500
0 ↓ 4300 ↓ 3700

「オレのターン、ドロー！」

ドロークカード『異次元からの埋葬』

先ほどドロークしたカードは『ミラクル・フュージョン』の効果で除外したカードを墓地に戻す為に入れておいた『異次元からの埋葬』のカード。

「手札の異次元からの埋葬を発動。除外したシャイニング・フレア・ウイングマン、サンダー・ジャイアント、スパークマンの三枚を墓地に送る。」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻撃力2500
0 ↓ 4600

再度の攻撃力の上昇を促す。だが、

「罨カード『覇者の一括』。このターン、バトルフェイズは行えない。」

『罨』の発動する罨カード、ハモンとレインボー・ドラゴンの咆哮がシャイニング・フレア・ウイングマンの動きを封じ込める。正に罨カードの名前に負ける事の無い二枚の覇者の咆哮はこのターンの不利を完璧に封じている。

（どうする… あいつは自分で自分のカードをゲームから除外した… だったら、最後の一枚の手札は除外されたモンスターを召喚できるカード。サファイア・ペガサスの召喚を許したら… その時点で負ける。）

サファイア・ペガサスの召喚↓永続魔法扱いで宝玉獣召喚↓レインボー・ドラゴンの攻撃力の上昇と言う流れによって5000の攻撃力を得たレインボー・ドラゴンはシャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力を上回る。次に待っているのは幻魔と残ったサファイア・ペガサスの直接攻撃^{ダイレクト・アタック}。その時点で自分の敗北は確定する。

これは飽く迄… 最も被害の少ないレベルでの話でしかない。そもそも、今の彼女の状況から考えてみると間違いなく、次のターンで再

びレインボー・ドラゴンの攻撃力が上昇する。なら、今の自分のデッキ…手札から取れる最善の手段は、可能性を広げるだけ。

「手札から『ホープ・オーバー・ファイブ』を発動！ デッキのフエザーマン、クレイマン、エアーマン、シャイニング・フレア・ウィングマン、サンダー・ジャイアントをデッキに戻し、カードを二枚ドローする！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500
0 ↓ 4600 ↓ 3100

墓地から五枚の『E・HERO』のカードが消えた事により、シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力が再び3100までダウンする。だが、これで二枚のカードをドローする事が出来る。

ドローカード『攻撃の無力化』

一枚目は攻撃力の無力化…これでこのターンを凌ぐことは出来る。だが…攻撃力の下がった今のシャイニング・フレア・ウィングマンが倒されるのにターンは少なすぎる。そして、運命の二枚目のカードは…。

ドローカード『リミット・リバーズ』

（来た！ リミット・リバーズのカード。手札にはネオスのカードがある。シャイニング・フレア・ウィングマン…あと一ターンだけ耐えてくれ。）

「オレはカードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

龍牙 LP 2900

フィールド

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力250

0 ↓ 3100

伏せカード二枚

攻撃の無力化

リミット・リバー

手札1枚

E・HERO ネオス

零 LP 3100

フィールド

降雷皇ハモン 攻撃力4000

究極宝玉神レインボー・ドラゴン 攻撃力4000

伏せカード

無し

手札2枚

フィールド魔法『虹の古代都市・レインボー・ルイン』

「私のターン、手札から永続魔法『魔力儉約術』を発動。そして、魔法カード『次元融合』発動。ライフを2000ポイント払い、ゲームから除外されたモンスターを全て特殊召喚。でも、『魔力儉約術』とのコンボでライフコスト無しで、サファイア・ペガサス、アンバー・マンモス、トパーズ・タイガーを特殊召喚。」

空の風景が砕け、砕けた空から異次元らしき空間が姿を見せる。そして、その中から三つの宝玉が落下し、宝玉獣へと姿を変えてトパズ・タイガーとサファイア・ペガサスが攻撃態勢を、アンバー・マンモスが守備体制を取る。

「サファイア・ペガサスの特殊効果、サファイア・コーリング発動。デッキのルビー・カーバンクルを永続魔法扱いでセット。」

サファイア・ペガサスのサファイアの角の放つ光に導かれ、『零』のフィールドに姿を見せるルビーの宝玉…。

「レインボー・ドラゴンの攻撃…オーバー・ザ・レインボー。」

「罨カード発動、二枚目の『攻撃の無力化』だあ！」

レインボー・ドラゴンの撃ち出す虹色の光を飲み込み、シャイニング・フレア・ウィングマンへの攻撃を無力化する。

「オレのターン、ドロー！」

ドローカード『第六感』

「罨カード発動、『リミット・リバーズ』発動！ 蘇れ、『ネオスベーションN・フレア・スカラベ』！」

炎の中から炎を纏ったカブトムシの様な印象を与えるモンスター『ネオスベーションN・フレア・スカラベ』がその姿を現す。

ネオスベーションN・フレア・スカラベ 攻撃力500 ↓ 1700

「そして、手札から『第六感』発動、1〜6までの数を宣言し、サイコロを振り、その二つの数字が一致した時、その数だけデッキからカードをドロー出来る。そして、外れた場合はその分だけ墓地に送る。オレが選択する数字は『4』だ。」

ソリッドビジョンで現れたサイコロが龍牙の宣言によって転がる。外れた場合でも墓地にカードを送る事で上手く行けばシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力の上昇を狙えるのだ。

そして…そのダイスが示した数字は…『4』

「よし、カードを4枚ドロー！」

デッキからカードを素早くドローし、そのカードを一枚一枚、確認する。

「来た！ 速攻魔法『サイクロン』発動！」

龍牙の魔法カードの効果によって発生した竜巻によって『雲』のフィールドに存在するルビーの宝玉を破壊する。

「続いて、フィールド魔法『ネオスペース』発動！」

そのカードの発動によって、古代都市は砕け散り、七色の宇宙空間へとフィールドを作り変える。

「そして、墓地のネクロ・ダークマンの効果で…手札から『E・HEROネオス』を生贄無しで召喚！！！」

E・HEROネオス 攻撃力2500 ↓ 3000

光が集まりその中から、『E・HEROネオス』がその姿を現す。これで準備は完全に整った。

「手札から魔法カード『未来融合―フューチャー・フュージョン―』発動、オレは『E・HEROエリクシーラー』を選択…デッキからバーストバトルマフェザー・タレイマン火、水、風、土の四体のモンスターを墓地へ送る！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500 ↓ 4300

墓地から伸びる四色の光がE・HEROシャイニング・フレア・ウィングマンへと流れ込み、その輝きを強化する。

「カードを一枚伏せて…。行くぜ…ネオス、お前の真の力をここに解放せよ！ネオス、フレア・スカラベ…『コンタクト融合』！！」

二体のモンスターの姿が混ざり合い、今ここにネオスの真なる力を解放する。

「来い…『E・HEROフレア・ネオス』！！！」

二体のモンスターが融合した新たなモンスターはネオスをベースとして、フレア・スカラベをイメージさせる昆虫の様な姿とクワガタをイメージさせる角を持った融合モンスター『E・HEROフレア・ネオス』がその姿を現す。

E・HEROフレア・ネオス 攻撃力2500 ↓ 4500 ↓ 5000

フレア・ネオスの出現にあわせ、『雫』と龍牙の魔法・罫カードが燃え上がり、フレア・ネオスの攻撃力を上昇させる。

「雫…これが君の望んだ戦いじゃないのなら、レインボー・ドラゴンと一緒にその呪縛を開放する！ 行け、フレア・ネオス！！！！
バーン・ツー・アツシュ！！！！」

「レインボー・ドラゴン、迎撃。」

龍牙のフレア・ネオスの放つ巨大な火球と『雫』のレインボー・ドラゴンの放つ七色の光がぶつかり合う。均衡し合う虹と炎だが、フレア・ネオスが更に炎を打ち出し、レインボー・ドラゴンを打ち砕く。

雫 LP3100 ↓ 2100

「シャイニング・フレア・ウィングマン…闇の呪縛^{ハモン}を打ち碎け！！
！ シャイニング・シュート！！！！」

シャイニング・フレア・ウィングマンの輝きが降雷王ハモンを飲み込み始め、その輝きによってハモンの体が石へと変わり、朽ち果てていく。

雫 LP2100 ↓ 0

ライフがゼロになり、ソリットビジョンが消えると同時に突然、崩れ落ちる雫の体を慌てて駆け寄った龍牙が支える。

「おい、大丈夫か？」

「いや……いや！！ 止めて…私から持っていかないで…大切な宝玉獣を…」

「落ち着け、大丈夫だ。誰も君のカードは持って行かない！ …お前と宝玉獣はオレが助けるから！」

龍牙の言葉が聞こえたのかは疑問だが、数枚のカードをデュエルデスクから外して龍牙に渡し、雫は意識を失う。彼女の持っていたカードはパズルカードと『究極宝玉神 レインボー・ドラゴン』のカード。

「宝玉獣を…護って。」

最後に彼女のそんな言葉が届いた気がした。

数分後、龍牙の呼んだ救急車で雫は運ばれていった。無言のまま龍牙は『究極宝玉神 レインボー・ドラゴン』へと視線を向け続けた。いた。

「…今だけ、君のカードを借りる。君の宝玉獣も…君も…マリクか

ら、オレが護るから。」

レインボー・ドラゴンのカードをデッキへと収めた瞬間、龍牙の背中に衝撃が襲う。

「っ!？」

「龍牙、見つけた♪」

静かな声だが心から嬉しいとも言っ意識が聞き取れる少女の声。その声に反応して後ろを振り向くと…そこには、

「夕美。」

「うん。」

笑顔で自分を見上げている『D・HERO』のカードを持つ少女…龍牙を探していた少女『氷川 夕美』の姿があった。

嬉しそうに子犬の様な様子で龍牙に夕美は抱きつく。龍牙は知っている彼女のその態度も笑顔も、自分にしか見せ無いと言う事を…。

だが、うかつにも気が付いていなかった。

『降雷皇ハモン』のカードがその場から消えていた事に…。

そして

「へー… 宝玉獣と幻魔の一角を同時に相手にして勝つなんてな。流石はオレと同じ『介入者』と言ったところか？」

降雷皇ハモンのカードを含む三幻神に似たモンスター達『三幻魔』のカードを持ち、冷たい笑みを浮かべ、彼らを見下ろしている少年に…。

「今はまだ動くときじゃないけど、楽しみだな… ヤツとのデュエル…。… なあ、マリシヤス・エツジ… ダークホルス。」

彼の背後に薄らと浮かび上がる二体のモンスター… 漆黒の翼と炎を纏うドラゴンとダークブルーのスーツに身を包んだ人型の悪魔の様なモンスターが頷くのだった。

つづく…

決闘06：（後書き）

V S 宝玉獣編終了です♪ 遂に龍牙君はヒロインと合流しました。
そして、いよいよ次回からアニメの本筋に絡んでいきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5458d/>

遊 戯 王デュエルモンスターズHERO's

2010年10月10日14時04分発行